

# 武氏祠画像石の基礎的研究

—Michael Nylan “Addicted to Antiquity” 読後—

黒田 彰

一、序論—武氏祠の概念形成

二、斑碑

三、榮碑、開明碑、梁碑（一）

四、梁碑（二）

五、西闕銘、結び—通説とニラン説

小稿は、Michael Nylan “Addicted to Antiquity” (Recarving China's Past 所収、Princeton University Art Museum, 2005) の批評である。ニラン論文は、近時、私の手掛ける孝子伝図を考える上で、古典中の古典とも言うべき、後漢武氏祠画像石について、全く新しい視点から論じたもので、ニラン女史の発表ともども世界的な評判を呼んだ。小論は、三章から成るニラン論文の第二章、石碑概要 Stele Summary を批評したものである。石碑とは、武氏祠画像石の施主たる山東、金郷の武氏一門に纏わる五つの碑文を指し、武氏祠の概念を形成する基本資料に相当している。女史は、それら五つの碑文を鋭く批判、その歴史資料性を否定して、武氏一門の実在を疑い、これまでの通説を解体して、最終的に武氏一門を画像石から切り離そうと試みている。小稿は、五章に互って、原資料に溯りつつ、具体的に女史の行論の跡を辿ることによって、その当否を明らかにしようとするものである。

Michael Nylan 女史の“Addicted to Antiquity”(ingū) : A Brief History of the Wu Family Shrines, 150-196CE (Re-carving China's Past : Art, Archaeology, and Architecture of the “Wu Family Shrines” 所収、Princeton University Art Museum, 2005) を読んだ。驚いたのは米国における東洋学（聊か古風な言い方をすれば、支那学）の水準の高さである。読み進むにつれ、そこで自在に使い熟されてゆく、圧倒的な漢籍の質と量には、ただただ舌を巻いた。取り分けニラン女史の論攷内容は、中国美術史、特に石刻芸術史に屹立する古典中の古典、後漢武氏祠画像石を対象とするものであって、その形成史を批判的に顧みようとする点、一読者に過ぎない私に対しても、それを基本から捉え直す機会を与えてくれた。そして、武氏祠画像石に注ぎ掛ける、女史の視線の真摯さに、深い畏敬の念を抱かずにはいられなかった。

しかしながら、研究水準の高いことと論の当否とはまた、自ずから別の問題である。ニラン論文は、

#### I. Introduction

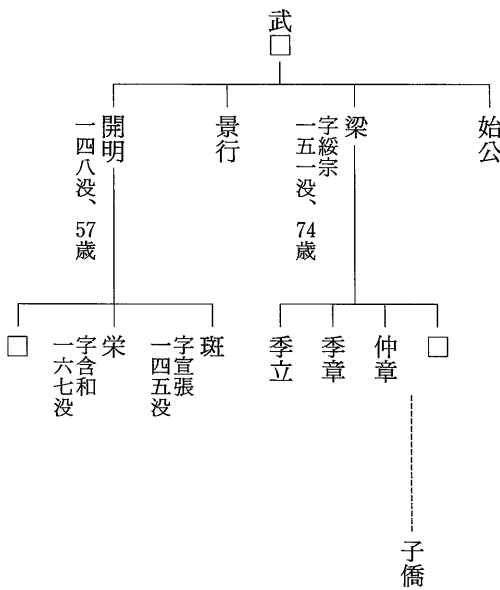
#### II. Stele Summary

#### III. The Wu Liang Pictorial Stones : The Literary Evidence

と題した三つの章から成っている。第二章は石碑（武斑碑、武荣碑、武開明碑、武梁碑、西闕銘の五つ）を扱い、第三章は所謂、武梁画像（武氏祠画像）を論じたものである。そして、その第二章は、武斑碑を始めとする五つの碑文に基づく、従来の通説を痛烈に批判したもので、結論的に、五つの碑文は武梁画像から切り離され、武梁画像との関係を否定されるに至っている。ニラン女史の論文は、従来の通説をこのように言わば木端微塵としてしまう方向性をもっているもので、例えばもしその第二章を正しいものとするならば、これまでの私達の武氏一族に関する概念は、その意味を全て失って解体し、武梁画像は、幾つかの無名の軍人（即ち、武人）貴族の祠堂を寄せ集めたものに帰することになる。さて、ニラン論文のその方向は、果して正しいのであろうか。或いは、女史の主張するように、従来の通説は、もはや生き延びることが許されないものであろうか。小稿の目的は、取り敢えずニラン論文の第二章を対象として、女史の行論を具体的に検証することであり、併せて、通説との対比を試みつつ、五つの碑文に関する、女史の見解の当否を明らかにすることである。

そこで、ニラン論文の検討に先立ち、女史によって批判的とされた、従来の通説のあらまし、即ち、五つの碑文から概念的に帰納される武氏一族の構成、また、その武氏

一門と武梁画像との関係、そして、存否も含めた五つの碑文の文献上の所在などの事柄に、簡単に触れておく。まず左に掲げるのは、武斑碑を始めとする、五つの碑文から概念的に再構成された、武氏一族の系図である（後述、関野貞の著作に拠る）。



ところで、上の系図に表われた武氏一族と、所謂武梁画像との関わりについて、E・E・シャヴァンヌなどと前後して、親しく中国山東省を訪れた、我が国の関野貞は、古典的名著『支那山東省に於ける漢代墳墓の表飾』（『東京帝国大学工科大学紀要』8冊1号、大正5（一九一六）年3月）三章乙の中で、次のように述べている。

武梁の石室に関しては、早くより隸釈は前掲碑文の義を推して、金石録に唯武氏石室画像と載せし者を、始めて武梁祠堂画像を以て之に名づけたり。後世亦、之に頼りて改めず。確証あるにあらずれども、姑く之に従ふことゝすべし。開明武斑武榮皆碑ありたれば、此等亦、各石祠を有せしなるべく、又、他にも石祠石碑を有せし者も、或は之あるべし。黄易の記によりて、石碑及び武梁祠の外に、彼が前石室及び後石室を発掘し、後李鉄橋等左石室を発掘せしことを知るを得たれども、此等石室が何人に属すべき者なりや明かならず。今此等出土の画像石には、一一何石室第何石と陰刻し、出処を明かにしたれども、往々他の石室に用ひられし画像石の混在せるを免れず。例へば後石室の第六石第七石は、左石室の第三石と同形式同手法にして、当初は前記の諸石室と異り、別に他の石室を構成せし者たること明かなるが如し。此等石室の何人に属すべき者

たるやは明かならざれども、其の何れかが開明、武斑、武榮等の者に該当すべく、皆後漢末即、大要桓靈間（約千七百五十年前）に成りし者と推定せんも、敢て不当にはあらざるべし

そして、右に示した武氏一族の系図など、現代の武氏祠画像石研究の大きな成果である、蔣英炬、吳文祺氏『漢代武氏墓群石刻研究』（山東美術出版社、一九九五年）三章に殆どそのまま受け継がれるに至っている。なお同時期、大村西崖による『支那美術史彫塑篇』（仏書刊行会図像部、大正4（一九一五）年）五十六頁が、

武榮の享堂は、黄小松以来武氏前石室とのみ称し来りしものにして、これを武榮の祠堂と定むるは本書を初めとす。何に由りてこれを知るかと云ふに、武榮の碑（隸釈十二。金薤琳琅に出づ。金石錄十四亦これを記せり。）に曰はく、

仕為三州書佐郡曹史主簿督郵五官掾功曹守從事。年卅六。汝南蔡府君。察孝廉。□□郎中。遷執金吾丞。

而して謂はゆる前石室画像中の題榜に「君為三都□一時。」「五官掾車。」「君為三市掾一時。」（第九石。）「主簿。」「為三督郵一時。」「行亭。」（第十石。）等の刻記ありて、榮の閱歷を録したるに外ならざること、碑文

に照して明かなりとす

と指摘していることも重要で、容庚『漢武梁祠画像錄』（考古學社專集13種、北平燕京大學考古學社、民國25（一九三六）年）考釈四の參看する所となっている。さて、例えば武梁画像のことを、閔野は、「確証あるにあらざれども、姑く之に従ふことゝすべし」と言い、また、武梁祠以外の石室のことを、「此等石室が何人に属すべき者なりや明かならず」と述べているが、これらの事實は、今日においても何ら変わる所がない。故に、武梁画像に纏わる通説は、それを踏まえつつ、さらに上引閔野の、

此等石室の何人に属すべき者たるやは明かならざれども、其の何れかが開明、武斑、武榮等の者に該当すべく、皆後漢末即、大要桓靈間……に成りし者と推定せんも、敢て不当にはあらざるべし

と言う地平に成り立つてくる訳だが、ニラン女史の批判は、正しくその間隙を衝いたものであることに、注意を払う必要がある。また、武氏祠からは往時、五つの碑文が出土したと言われている。その五つとは、

- 1 武斑碑
- 2 武榮碑
- 3 武開明碑
- 4 武梁碑

## 5 西關銘

のことであるが、現存するのは1、2及び、5の三つで（それぞれ傷みがある）、残る3武開明碑と4武梁碑の二つは、何時しか失われ、今に伝わらない。それらの碑文の内容に関しては、集古録（宋、歐陽脩撰。また、子の棐の撰んだ集古録目）、金石録（宋、趙明誠撰）、隸釈（宋、洪适撰。また、同撰の隸統）などに記載されている。参考までに、それら諸書における、五つの碑文の記載状況を、左に一覧としておく（空欄は、その書物に記載のないことを示す）。

集古録	金石録	隸釈	(存否)	
○	○	○	○	斑碑
○	△ †	○	○	榮碑
	○			開明碑
	○	○		梁碑
	○		○	西關銘

† 目録二二五に碑名のみあり

## 二

それでは、ニラン論文の II. Stèle Summary (石碑概要) において述べられている、幾つかの点について、以下少し具体的に、考察を廻らしてみたい。その第二章は、上記の斑碑に始まって西關銘に終わる五つの碑文を、順番に論じてゆく形で進められている。考察の対象となる五つの碑文は、それが原石からのものであれ、或いは、文献に記載されたものであれ、原則的に一旦、拓本の形を取った資料を、私達は常時扱うことになる。この対象資料の特殊な性格は、武梁画像を論じたニラン論文の三章においても変わりがない。このことに関して、ニラン女史は、一章の五一五頁左に、女史の考え方というものをはっきりと表明している。

Where rubbings bear no seals or identifying marks, the main methodological rule has been this: the greater the damage to the stone revealed by the rubbing, the newer the rubbing is likely to be.

（落款印、或いは、〔制作年代を〕識別する特徴の全くない拓本の場合、〔それを判定する〕およそのやり方の約束事は、こうである。即ち、摩擦によって石の表面に現われた摩擦の度合いが大きい程、その拓本はより新しいであろう〔ということだ〕。）

そして、女史はまた、五一五頁右に、次の如く付け加えて

いる。

But because such rules were known to ardent antiquarians and capable forgers alike, this essay takes another tack.

(しかし、そのような約束事は、熱心な古物収集家や腕の良い贋物作りにも等しく熟知されていたので〔彼等に掛れば殆ど役に立たず〕、この試論では別の方針を採る。)

この女史の考え方、方針は、ニラン論文全体を貫くものと見受けられるが、まず始めに、ニラン論文を批評する私の、拓本についての考え方を明らかにしておく。時の経過と共に、原石が摩滅することによって、拓本は判読し難いものとなるという、女史の考え方は、一般論として確かに間違いいではない。しかし、私は、その一般論を、欧陽脩により金石学が創始され、趙明誠、洪适らへとそれが継承、発展してゆく北宋後期、南宋前期に対し、無限定に当嵌めようとは思わない。成程、金石学の興隆と共に、拓本概念が一般化するのには、宋代と言えようが、欧陽脩から洪适に至る金石学の謂わば黎明期、原石が摩滅に瀕するまで、何百回となく拓本の作られるような光景が、日常的に見られたとは聊か考え難いからである。先の一般論が該当するのは、宋代以降、特に金石学が隆盛を迎える清代と考えるべきであらう。また、拓本や原石の偽造が常に問題となる時期も、同じく清代である。従って、私は、女史の言う一般論を否

定するものではないが、さらに柔軟に、金石学の黎明期であればこそ、拓本の内容が後々徐々に詳しくなつてゆくような過程も、想定し得るものと考え、余程の事情がない限り、その過程を、直ちに贋作の問題へと結び付けようとは思わない。欧陽脩から洪适に至る、金石学の古典において贋作を論じようとするなら、それなりに別途、考証の用意が必要であると思うからである。そこで、小稿の使命は、以上のような、女史とは少し異なる考え方に基いて、且つ、私の専攻する文献学的立場から、ニラン論文二章における、五つの碑文に向けられた、女史の方針に添う考察の跡を、具体的に辿りつつ、そこから導き出された、幾つかの女史の結論の可否を、改めて検証することになるであろう。

まず斑碑に関する論を見ると、それは、次のように展開されている。注りを併せ掲げる(原文左に、拙訳を添えた。斑碑は現存するが、現状は、「由于長期風化、歴代捶拓、石面漫漶、文字剝落、絕大部分字跡模糊不清。碑額題字也模糊難弁」であるという(蔣英炬、吳文祺氏前掲書三章三))。なお欠落部分の字数は、「隸釈」原注下缺、字数不知。拠碑文所缺的字距、約為八字」とされている(同上注②)。

ang Xiu and his son Ouyang Fei had in their possession a single rubbing dedicated to a man whose personal name was Ban. An appended notice in some editions refers to a second version of the same rubbing, which supplies the individual named Ban with the family name of Wu. This appended notice appears to be an interpolation.<sup>9</sup> In any case, the version(s) of the Ban rubbing known to the Ouyangs had no stele heading, and it lacked, by Ouyang's estimation, some 80-90 percent of the original stele inscription. No home province, district, or official rank could be read, and no dates for the death and burial. An incomplete date could be seen, transcribed in nine characters. As the second of the two characters making up one part of the date was illegible, Ouyang concluded that the stele for Ban must have been carved on the *dinghai* day of the first year of Jianhe(47 CE). The Ouyangs gave no indication that Ban and Fong might be related, though the *Jigu lu* groups family inscriptions elsewhere.

9. See *Jigu lu*, *juan 2*, 78a-8b (p.17847). An appended notice there mentions a second, slightly better rubbing of the Ban stele inscription, found supposedly a decade later, in 1068, which gave the family name as Wu. There are at least three reasons to believe that the relevant passage represents an interpolation: (1) The note about the

second rubbing is appended after the notation referring to the *jiben* edition of 1209; (2) Neither Ouyang Fei's abbreviated catalogue nor the *Sibu congkan* edition of *Li shi*, *juan 21* (which presumably copies the Ouyangs' work as known to a later, possibly early Qing editor of Hong's classic) mentions a second, better rubbing; (3) The (Song) *Hanli ziyuan* (Siku edition), *juan 1*, 16a-b, clearly states that the Ouyangs' *Jigu* "did not know the family name [for Ban]." Also, Ouyang Xiu typically comments on its existence if a second version of an inscription is known to him. One may also ask why Zhao Mingcheng would have taken such pride in supplying Ban with the Wu family name, if one or more of the Ouyangs had already ascertained the family name on the basis of a second rubbing of the stele in their possession. (下略)

(集賢錄(一〇四五年—一〇六一年間成立、一〇六二年序)によれば、歐陽脩とその息子歐陽棨は、彼等の所蔵品の中に、班という名前の一人の男性に捧げられた、ただ一本の拓本を持っていた。幾つかの版における一付注は、班と名付けられた個人に、武という家族姓を与える同じ拓本の別本について言及している。この付注は、それが一つの改変であることを表わす。『いずれにせよ』とにかく歐陽達が知っていた、班の拓本の版には、碑額がなく、そして、それは欧陽の見る所、原碑の約八・九割を欠くものであった。出身地や治所、或いは、公的身分は全く読み取れず、死亡や埋葬に関する日付も、同様の状態だった。

た。九文字で筆録された、不完全な一つの年紀のみが見て取れた。年紀を構成する二つの文字の二番目のものは判読し難かったが、欧陽は斑の碑文が、建和元年（一四七年）の丁亥に当たる年に、彫られたに違いないと結論付けた。欧陽達は、集古録が他の箇所と同じ家族の碑文を一つに纏めているにも関わらず、斑と榮とが（系譜的に）関連し得る旨の指摘を、一切しなかった。

9. 集古録、卷2/8a-8b（二七八四頁）を見よ。その付注が、おそらく十年後の一〇六八年に見出された、僅かに良好な、武斑碑拓本の別本に言及しており、それは武という家族姓を与えるものだった。問題の一節が、一つの改変を示すものであると信じるに足る、少なくとも三つの理由が存在する。(1) 第二の拓本についての注記は、一二〇九年の集本版に関する表示の後に添えられている。(2) 欧陽斐の略目録にも、四部叢刊版の隸釈、卷二十一（それは、おそらく欧陽の作品を書き写したもので、後の時代、おそらく清代初期の洪作品の編者に知られていただろう）にも、第二のより良好な拓本に対する言及がない。(3) (宋) 漢隸字源（四庫版）、卷1/16a-bは、欧陽の集古が「斑にとつての」家族姓を知らない」ときっぱり明言している（「ことである」）。さらに、欧陽脩は通常、仮に碑文の別本が彼に知られていたとすると、その現存に関する注記を行う（答だ）。人もまた（次のことを）問うだろう、もし欧陽達の一人或いは、二人ともが、彼らの所蔵品中の第二の碑文の拓本に基づいて、既にその家族姓を突

き止めていたとするならば、何故趙明誠は、斑に武氏姓を付与することとを、あのように誇ろうとしたのか、と。（下略）

ニラン女史が問題としていているのは、集古録卷二の、次の斑碑の記述である。

後漢武班碑建和元年第五十五十一

右漢班碑者、蓋其字面殘滅、不復成文。其氏族州里官闕卒葬、皆不可見。其僅見者曰、君諱班。爾其首書云、建元年太歲在丁亥。而建下一字、不可識。以漢書考之、後漢自光武至獻帝、以建名元者七。謂、建武建初建光建康建和建寧建安也。以曆推之、歲在丁亥、乃章帝章和元年、後六十一年、桓帝即位之明年、改本初二年、為建和元年、又歲在丁亥。則此碑所缺一字、當為和字。眞跡無此六字、建和元年也。碑文缺滅者、十八九。惟亡者多、而存者少。尤為可惜也。故錄之。治平元年四月二十日書へ右集本。

後得別本、摸揚粗明。始并其一二。云、武君諱班。乃易去前本。熙寧二年九月朔日記

（孫谿朱氏金石叢書本）

加えて、欧陽斐の手に成る集古録目一にも、次の斑碑の記述が存する（但し、欧陽斐撰の集古録目は散逸しており、清、黄本驥や繆荃孫などの輯本に拠らざるを得ない）三長



物齋叢書、雲自在龕叢書所収」。武斑碑に関するその逸文としては、隸釈卷二十三所引のものが最古に属する。

### 武斑碑

右、不<sub>レ</sub>著撰人名氏、嚴祺字伯魯、隸書。君名班、字宣<sub>（下一字缺）</sub>、敦煌人。碑以<sub>二</sub>建和元年<sub>一</sub>立。今其文字磨滅、姓名鄉里、粗得<sub>二</sub>其髣髴<sub>一</sub>。而官爵事跡、皆不可<sub>二</sub>復知<sub>一</sub>矣<sub>（隸釈）</sub>（雲自在龕叢書本）

まずニラン女史は、集古録の「後得<sub>二</sub>別本<sub>一</sub>」以下を、後人の改変と考えている。理由は、情報量が増えていることで、一般的な拓本のあり方としては、時の経過と共に原石が傷み、拓本の情報量が減る筈だからである。考えてみると、何十年、何百年のスパンから見れば、確かにそれは正しい。しかし、集古録の二つの記述は、僅か五年を隔てるのみの話であつて（治平元<sub>（一〇六四）</sub>年—熙寧二<sub>（一一〇六）</sub>年）、そのように大きな時の経過を前提とする場合には該当しない。また、「後得<sub>二</sub>別本<sub>一</sub>」以下は、後人の改変であることの確証が存在している訳ではないから、ここでは、女史とは別の考え方も成り立つ。例えば集古録の二つの記述を、疑わず素直に解釈すると、どうなるのであろうか。欧陽脩が最初の拓本について記述したのは、治平元<sub>（一一〇六）</sub>年四月のことであり、別の拓本を入手して、そのことを記述したのが、熙寧二<sub>（一一〇六）</sub>年九月のことであつた。集古録の成立は、嘉祐治平間（一一〇五—一一〇六）とされるので（四庫提要）、欧陽脩が「後得<sub>二</sub>別本<sub>一</sub>」以下を書き込んだのは、集古録が一旦成立して後、脩の没する僅か三年前のことである（大野修作氏「欧陽脩『集古録跋尾』の成立とその書論」へ『東洋芸林論叢』所収、平凡社、昭和60<sub>（一九八五）</sub>年参照）。そして、このことは、脩の最晩年、集古録に、「後得<sub>二</sub>別本<sub>一</sub>」以下のあるものとなしいものとの、二種類の本が生じたことを示している。そもそも欧陽の家には、斑碑の拓本が二つあつたらしいことを物語るのが上掲、裴の集古録目の記述である。拓本の別本が、前本と較べ、余程状態の良かったことは、集古録の追記に、武姓が明記されていることに加え、「嚴祺字伯魯」「字宣□」「敦煌」等が、集古録目に引用されていることから、明らかである。そして、その拓本は、以前に入手した拓本（前本）より遙かに金石録、隸釈に近いものであつたが、おそらく「敦煌」等が<sub>（長次）</sub>が読み取れず、裴はその箇所を「敦煌人」と解釈したのであろう。このように、集古録目は、確実に前本とは異なる斑碑の拓本のことを記述しており、その事実、治平元年以後、いずれかの時点で欧陽の家に別本が齎されたことと、よく符合する。ところで、欧陽裴が父から目録の編纂を命じられたのは、集古録の成った八年後、そして、裴の集古録目の成立したのは、

熙寧二（一〇六九）年二月のことだから（裴序）、裴は、集古録の、父による「後得別本」の記事を見ておらず、おそらく父子ともに別途、各自で別本に関する記述をなしたものと思われる。このように考えるならば、集古録の「後得別本」以下を、女史の如く、敢えて後人の改変と捉える必要はない。引き続き、注9を検討してみる。

注9冒頭、集古録巻二の丁数表示、8a-8bは、7b-8aが正しい。さて、ニラン女史は、集古録「後得別本」以下の、後人による改変を疑う、三つの理由を上げている。(1)は、件の記述が、「治平元年四月二十日書へ右集本」の後に来ていることを言うのであろうが (*the iber edition of 1209* 不明)、それは、「後得別本」以下を、欧陽脩の書き加えとして採録したことを示すに過ぎず、後人による改変とは、何の関わりもないことである。(2)の、欧陽棐の集古録目についての女史の見解は、明らかに間違っている。集古録目には一見、別本に関する言及がないように見えるが、その内容は、前述の通り前本ではなく、別本によってなされているからである。女史の見解とはむしろ逆に、集古録目の記述こそは、録目の編纂時、欧陽の家に確実に別本が存在していたこと、即ち、「後得別本」以下が改変などではないことを示す、証左と見ることが出来る。四部叢刊本隸釈巻二十一に件の記述がないのは、

その底本とした集古録が、「後得別本」以下の書き加えない系統のものであったからだろう。(3)の、婁機、また、趙明誠の見た集古録も、同系統のものであったと考えられる。さて、北宋の後半、武氏祠が発見されると、武氏祠をめぐる情報が増加、蓄積されてゆく時期があった筈だ。一般に時を経て悪化してゆく拓本の状態も、原石の手入れや拓本の取り方によっては、以前読めなかったものが読めるようになったりすることが、あつたに違いない。欧陽の家に齎された二つの班碑の拓本は、そのような武氏祠研究史における黎明期の産物として、理解することが出来る。そして、それは趙明誠や洪适の時代まで続いたのである。

次に、ニラン論文における、隸釈の武班碑の記述の矛盾——特に武班の出自をめぐる、その記述の矛盾を指摘した部分について、考えてみる。

Following this lengthy date, the *Li shi* gives a ten-character title for Wu Ban, after which a single character, *long*, dangles, alerting readers to the possibility of a corrupt text. The *Li shi* then proceeds with the same thirty-two character passage with which Zhao began his entry, to which it appends more than two hundred characters, which include probable anachronisms (see below).<sup>13</sup> Moreover, the Wu Ban of *Li shi*, Juan 6, is a native of Rengcheng serving as Senior

Officer in Dunhuang, while a second Wu Ban, mentioned in another chapter included in present editions of the *Li shi*, is said to be a native of Dunhuang, thousands of miles from Fencheng. At first glance, the problem seems easy to resolve: the Wu Ban entry in *Li shi*, *juan 23*, is simply corrupt and/or less reliably old.

この長つたらしい日付に続き、隸釈は、武斑に対し、十文字の肩書を付与するが、その後には、読者に本文改変の可能性を考えさせる、ただ一文字の「同」がぶら下がっている。隸釈はさらにまた、趙（明誠）が彼の記載を始めたのと同じ、三十二字の一段を続けていて、そこに、時代錯誤の可能性を含んだ、二百を越える文字を付け加えている（以下を見よ）。<sup>13</sup> その上に、隸釈の卷六の武斑は、敦煌長史として仕えた、任城出身の人であり、一方、第二の武斑は、隸釈の現在の版に含まれた、もう一つの巻で述べられていることだが、任城から数千マイルも離れた敦煌出身の人であると言われている。一見、問題の解決は容易そうに見える。即ち、隸釈卷二十三における武斑の記載は、単に改悪されたものに過ぎず、且つ、信頼するに足る程古いものでもない。）

まず、Following this lengthy date以下とされるのは、隸釈卷六、武斑碑の冒頭部分、

建和元年大歳在丁亥、二月辛巳朔廿三日癸卯、長史

同闕下

敦煌長史武君諱斑、字宣張（下略。王雲鷺本）

のことを指している。女史の言う a ten-character title of ten は、何を指すのかよく分らない。その「下闕」注記の前後は文章が続かず、ここに欠落（判読不能部分）のあったことを示している。建和元年は一四七年で、武斑が卒した永嘉元（一四五）年の二年後に当たり、おそらく碑を作った年紀を述べたものであろうが、不審が残る。ただこの年紀に関しては、金石録には見えないが、前述の集古録卷二に、

其首書云、建元年太歳在丁亥。而建下一字、不可識

と見た、由来の古いものであることに、注意しなければならぬ。そして、ニラン女史は、そこに碑文本文の改変の可能性を指摘するが、この問題については、後程武梁碑、西關銘との関連において、具体的に詳述しよう（なお女史は、注13の中で、隸釈に見える「顯宗」の語が、後漢の明帝（治五十八―七十五）の廟号、また、東晋の成帝（治三二六―三四三）等の廟号を指すかとするが、碑文の前後の文脈から見て、一寸考え難い）。ところで、ニラン女史の指摘する、隸釈における、武斑の出自に関する記載の矛盾というのは、具体的には、例えば隸釈卷六の注に、

右故敦煌長史武君之碑、隸額在「濟州任城」。武君名斑、字宣張、從事梁之猶子、吳郡府丞開明之元子、執金吾

# 丞榮之兄也

等とあることと（任城は、山東省済寧県）、隸釈卷二十三所収「歐陽棐集古録目」武斑碑に、

君名班、字宣<sub>下</sub>。敦煌人

とあることとの食い違いを指している。そして、後者は先述、歐陽棐の著作、集古録目を洪适が転載したものに過ぎず、両者の違いは、隸釈自体の矛盾なのではない。つまり、武斑を「敦煌人」としたのは、欧陽棐であり、それは、棐がおそらく、「今其文字磨滅、姓名郷里粗得<sub>二</sub>其髣髴<sub>一</sub>、而官爵事跡皆不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>復知<sub>一</sub>矣」という状態の拓本を判読し、解釈した結果を記したものに外ならず、「敦煌人」は、碑文の写しと見るよりも、むしろ棐の注釈と見るべきものなのである。従って、隸釈の記述に矛盾がある訳ではなく、また、碑文に矛盾がある訳でもない。食い違いは、洪适の筆録した碑文と欧陽棐の解釈との間に生じているのであって、碑文をめぐる解釈上の誤解は、常に起こり得る事柄である。文献学的に矛盾を見る場合、碑文とその解釈という位相を混同してはならない。隸釈における斑碑の記述について、ニラン論文は、さらに次の如く続ける（注15も併せ示す）。

Juan 20-27, consisting of parts of the epigraphical classics compiled by Ouyang Xiu and Zhao Mingcheng, represents Ming or even

early Qing versions of those classics. The record may well point to a conflation of two or even three different Wu Ban steles, just as the sources list multiple Wu Kairings, with their own biographical similarities (see below). The Wu Ban stele inscription, as transcribed in the *Li shi*, is one of the very few texts to include mention of the calligrapher.<sup>14</sup> It also contains an unmistakable interpolation.<sup>15</sup>

15. *Li shi*, Juan 6/13b. Five characters (*Yan Qi zi Bolu*) come from another entry, probably from Juan 29/10b. An entry for Yan Qi may be found in *Jinshi liu* (no. 65).

（隸釈）卷20―27は、欧陽脩と趙明誠（達）の編纂した、金石学の古典を収録する部分部分から成っているが、それは上記作品に関する、明時代或いは、清朝初期の版を表わしている。その記録は、二つないし、三つ以上の武斑の碑文の合成をよく示すものと見て良い。ちょうどそれは、幾つもの資料が、各々伝記として類似する、多くの武開明（の記事）を列挙することと同じである（以下を見よ）。隸釈に書き写された武斑の碑文は、書家への言及を含む、数少ない本文の一つである。<sup>14</sup> それはまた、見聞違いのような改変を有している。<sup>15</sup>

15・隸釈卷6／13b。五つの文字（嚴祺字伯曾）は、他の記述から来たもので、おそらく卷29／10bからであろう。嚴祺という一語は、金石録（65番）に見出されよう。）

隸釈卷二十以下、即ち、「酈道元水經注」その他を再収録した巻々を以つて、直ちに斑碑の合成の証左とする、ニラン女史の見解には同じ難い。それは例えば上述の、欧陽の家にあつたと考えられる、斑碑の二つの拓本の場合を見ても、分かることである。また、武開明のことは、後述に従うとして、斑碑に碑文の書家に関する言及のあることも、斑碑の後世における合成、改変の決め手となり得ないことは、例えば武梁碑中の珍しい画工（「良匠衛改」）への言及例が、近時やはり後漢の郷他君石祠堂石柱にも見出されたことを想起すべきである（長廣敏雄氏編『漢代画像の研究』〈中央公論美術出版、昭和40（一九六五）年〉一部四章参照）。ニラン女史の言う an unmistakable interpolation は、注15によれば、隸釈卷6／13bの、

……防東長斉国臨菑國紀伯允書此碑、嚴祺字伯曾

（四庫本）

を指している。そして、女史は、その末尾の「嚴祺字伯曾」五字「Five characters (Yan Qi zi Bozu)」が他書からの剽窃であり、おそらく巻29／10bから採られたものであらうと主張する。その巻29／10bが不審で（隸釈は巻二十七までしかない）、それは多分、巻23／14aの誤りではないかと思われる。隸釈卷23／14aは、前述のように欧陽斐の集古録目を転載したもので、そこには、

#### 武班碑

右、不著<sup>1</sup>撰人名氏。嚴祺字伯魯、隸書。君名班、字宣（下一字缺）（下略。四庫本）

という記述が見えている。ところが、女史の上げる五文字は、集古録目から隸釈へと、簡単には転じ得ない事情がある。何故かと言うと、集古録目と隸釈とは、その五文字目が、

嚴祺字伯魯（集古録目）

嚴祺字伯曾（隸釈）

と異なっているからである（隸釈卷六は、王雲鷺本、汪日秀本も、「曾」〈zeng, ceng〉に作る）。両字は字形が近いので、いずれかの誤字であろうが、それにしても両字が異なっている以上、当句が集古録目から隸釈へと、直線的には転じ得ないことが分かるだろう。なお一層認め難いのは、その内の「嚴祺（Yan Qi）」という語が、金石録（65番）に見出されるとする、女史の指摘である。金石録卷一、目錄一の、

第六十五、漢祝長嚴祈碑<sup>2</sup>和平元年

を見れば明らかなように、ここでも、

嚴祈（金石録）

嚴祺（隸釈）

と、やはり二字目が異なっており（祈はxin）、金石録のそ

れは、隸釈の直接の出典ではあり得ない。金石録の嚴訢碑は、第六十六の武梁碑に接していて、確かに目に止まり易いものではあるが（碑文は卷十四に収める）、ともあれ、女史の指摘は、思い付きの域を出ないものと言わざるを得ない。

武斑碑に関連してもう一点、ニラン論文の参照した、葉奕苞の金石録補続跋のことに触れておく。ニラン女史は、次のように述べている。

Ye Yibao's (act.1697) classic work, *Jinshi lu xuba* (Further notes on [Zhao's] "Records of metal and stone") states that the donor list includes a reference to the post of *fucheng* (Assistant in the fu) that almost certainly indicates a Tang date for the Wu Ban stele inscription.<sup>17</sup>

（葉奕苞の（二六九七刊）古典的作品、金石録続跋（趙の金石録にさらに注を加えたもの）は、石碑の寄進者の名簿中に、府丞（府の補佐役）に関する言及が含まれており、それはほぼ確実に、武斑碑の（制作）年代が唐時代であることを示す、と明言している。）<sup>17</sup>

ニラン論文が参照したのは、金石録補続跋卷四、「漢敦煌長史武斑碑」中の左の記事である。

秦置郡守。景帝中二年、更名太守。凡郡有丞。至唐始以大州為府。後遂以府易郡。而漢領県者、非国則郡。如陳留之丞宜曰郡丞。而此碑曰、陳留

府丞。武斑之父開明碑、除吳郡府丞。高頤碑、蜀郡北部府丞

府丞は、通常、役所の次官を言うが（郡丞は、郡の次官。その辺境にあるものが長史）、斑碑に記された陳留（郡）府丞や、開明碑に記された吳郡府丞など、それが郡と関係した場合に、問題が生じる。漢代には、郡府丞の官職名が見当たらないからである。郡は、言うまでもなく漢代の行政区画の称であるが、府も行政区画を指す時があって、例えば清、顧炎武の日知録卷八に、「漢曰郡、唐曰州。州即郡也。惟建都之地乃曰府……至宋而大郡多升為府」と言う如く、一般に行政区画としての府（即ち、旧来の郡を府と称すること）は、唐代以後の制度と理解されているので、陳留府丞（斑碑）や吳郡府丞（開明碑）など、郡丞を府丞と称することは、唐代以降の制度を踏まえた結果と解釈されることになる。葉奕苞が、「凡郡有丞。至唐始以大州為府。後遂以府易郡……而此碑曰、陳留府丞。武斑之父開明碑、除吳郡府丞」と言うのは、そのことを指したものである。そして、ニラン女史は、その葉奕苞の言を、斑碑（また、開明碑）の制作時期を唐代とするものと理解したのであった（因みに、葉奕苞は、決してそのように述べていない）。すると、斑碑、開明碑は紛れもなく唐以降の偽作となってしまう訳だが、例えば「郡府

丞」(開明碑)などの語の用例は、本當に唐以降のものなのだろうか。後漢、建安十四(二〇九)年の高顯碑に「蜀郡北部府丞」と記す用例があることは、既に葉奕苞自身が指摘しているが(隸釈卷十一参照。ニラン女史も留意している)、なお任伯嗣碑には、「蜀郡府丞」と記す用例も見える(金石錄卷十五、隸統卷十五参照)。さらに郡府丞という語は、東觀漢記卷十四列伝九鮑永、謝承後漢書(羊統。太平御覽卷四二五所引)等にも散見するのである(後漢書の鮑永伝、羊統伝では共にそれを、「府丞」に改めている)。すると、郡府丞などあることを以て、直ちに斑碑や開明碑を、漢代のものではないと断言することは出来ないことになる。ニラン女史の主張は、強引過ぎるものとすべきだろう。さて、漢代の郡府丞の実体に関しては、後考に俟つべきものと思われる。

### 三

ニラン論文は、武斑碑に次ぎ、武榮碑、武開明碑の論評へと移つてゆくが、ここでは、武榮碑、武開明碑のそれぞれについて一点だけ、ニラン女史の見解を糺しておく。ニラン論文が、例えば問題提起の斬新さ、主題提示の鋭さにおいて、読む者の内に爽快な感動と深い探求心を喚び起こす、数少ない名論文であることは、まず間違ひなく断言出来

る。ところが、一方でその瑕玷とすべきは、ニラン女史の筆の荒さ、或いは、細部に對する氣配りの欠如であろう。とにかくニラン論文には、記述の誤りが多いのである。そのために意味が汲めず、立ち往生することも一再ではない。以下、その一、二に触れよう。

次に掲げるのは、ニラン論文五二三頁左の、武榮碑のことを述べた一節である。

The *Li shi* text supplies a greatly expanded version of the Wu Rong stele. To the total of 74 characters that had been legible to Ouyang, *Li shi* added 148, 11 of which give the names and titles of Wu Kaiming and Wu Ban, all of which is very odd for a stele text dedicated to Wu Rong. (中略) These eleven characters most probably represent commentary that has been interpolated into the main text.

(隸釈の本文は、武榮碑の大規模に増補された版を提供するものだ。歐陽達が判読し得た計七十四文字に對し、隸釈は一四八字を加えたが、その内の十一字は、武開明と武斑とに名前と肩書とを与えるもので、武榮に捧げられた碑文の本文としては、その全てが非常に奇妙なものだ。(中略) これら十一の文字は、本文本体に對して改変が行われたことを、如実に示すものと見て、まず間違ひない。)

まずニラン女史は、歐陽脩(即ち、集古錄)の採録した武榮碑の字数を、七十四字と数える。問題は、次の洪适(隸釈)の記した字数で、私が王雲鷺本でそれを数えると、二

執金吾丞武榮碑

君諱榮字合和治魯詩經掌君章句開懷傳詩孝經  
論語漢書史記左氏國語廣學觀微靡不貫綜久序  
大學嶺然高厲終於雙匹<sup>字</sup>學優則仕爲州書佐郡  
曹史主簿督郡五官掾功曹字從事年世六汝南蔡

府君察舉孝廉<sup>字</sup>郎中遷執金吾丞遭孝桓大憂

毛守文武<sup>字</sup>感哀悲愷加過苦哀遺疾殯<sup>字</sup>四君

即吳郡府卿之中子敦煌長史之次弟也唐孝相承

亦世載德不<sup>字</sup>命<sup>字</sup>不竟台徽蓋觀德於始述

行於終於是刊石勒銘垂示無窮其辭曰

天降雄英資丰卓茂仰高鑽堅允文允武內幹三署

外闕<sup>字</sup>旆旅<sup>字</sup>勒毛守舊威<sup>字</sup>武<sup>字</sup>旌終天雷震電舉

軟耀赫然陵惟嗟<sup>字</sup>肅當<sup>字</sup>股肱<sup>字</sup>之元輔天何不市

降此<sup>字</sup>咎<sup>字</sup>癘<sup>字</sup>乎我君仁如不壽爵不副德位不稱功

碑本第十二

咸哀傷悽遠近哀同身汝<sup>字</sup>萬世諷誦

右漢執金吾丞武君之碑隸額在濟州武君名榮

吳郡君名開明敦煌君名瑒<sup>字</sup>之亡在靈帝初漢

興魯申公爲詩訓故齊轅固燕韓嬰皆爲之傳又

有毛氏之學故曰詩分爲四申公授瑕丘丘公章

詒治詩事丘公傳子元成皆至丞相孫賞以詩授

哀帝至大司馬魯詩有韋氏學此云治魯詩經掌

君章向者此也開懷者未冠憤之稱語在武榮碑

中龜古鮮字<sup>字</sup>龜於雙匹者鮮雙兼<sup>字</sup>也

圖一 王雲鷺本隸釈卷十二 武榮碑

五五字となる（圖一参照。四庫本、汪日秀本も同じ）。従  
つて、そこから集古録の七十四字を引くと、隸釈が増益し  
たのは一八一字となつて、女史の言う一四八字と合わない  
のである。その一四八という数字が何処から出て来たのか、  
私には分からない。次に、女史は隸釈の増益分の内の十一  
字が、武開明と武斑の二人に名前と肩書とを与えるものだ  
とするが、その原文は、

君即吳郡府卿之中子、敦煌長史之次弟也

と言うもので、字数は十七字、しかも肩書は与えるが、名  
前は与えていない（名前を与えるのは、洪适の注文  
「武君、名榮。吳郡君、名開明。敦煌君、名班」である）。  
この十一という数字も何処から出たのか、私には理解出来  
ない。さて、その十一字（十七字か）が改竄されたものか  
どうか、肝心のテーマを考える以前に、隸釈諸本の字数を  
幾度も数えることになる。改めて隸釈榮碑の記述全体を眺  
めるに、女史の言う一四八字は、榮碑に対する洪适の注釈  
「右漢執金吾丞……鮮双寡匹也」を指し、同じく十一字  
は、その中における、前述注文の傍線部（「吳郡君……名  
班」）を指すものらしい。すると、両者は、隸釈の引く碑  
文本文について言われたものでなく、洪适の注文に関して  
言われたものであるから、やはり榮碑の碑文本文とは、全  
く関わりのない主張となつてしまふ。そして、洪适が碑文



本文に一四八字を加えた事実などはなく（洪适の加えたのは、一八一字である）、ましてその内の十一字が、碑本文に対する改変を示すなどという筈はあり得ないことが、自ずと明らかである。碑文の本文批判において、その本文と注文とを混同すべきでないことは、前に述べた。なお後にも問題となるだろう。

武開明碑の内容を紹介し、その没年（建和二一四八）年）に付けられた、ニラン論文の注30も、大変分かりにくいものである。

30. *Shandong tongzhi* (*Siku edition*), *juan* 9/110b, under the heading "Changshi Wu Ban," citing *Jinshi lu*, says that the "old records" "write Wu Kaiming [instead?]...." Cf. Wang Jian (*Ming dynasty*), whose record of Suzhou, *Gusu zhi* (*Siku edition*), *juan* 37/9a, has Wu Kaiming dying in 197 CE (not 148); cf. *Wanxing tongdian* (*Siku edition*), *juan* 78/9a, which assigns Wu Kaiming a Jin-dynasty date of Yonghe 2 (347). (*Yonghe* 1 corresponds to 346, 417, 434, or 936 CE.)

(30) 山東通志（四庫版）、卷9／110b、「長史武班」の標題下に、金石録を引用し、「旧志」は「武開明と書く〔代わりに？〕……」。比較せよ、王鏊（明時代）、彼の蘇州の記録、姑蘇志（四庫版）、卷37／9aは、武開明の死を一九七年とする（二四八でなく）。比較せよ、万姓統譜（四庫版）、卷78／9aは、武開明を晋時代の永和二（三四

六）年に配する。（永和二年は、三四六年、四一七年、四三四年、または、九三六年に該当する。）

まず始めに参照を指示されているのが、山東通志（四庫版）卷9／110bの、

長史武班碑（漢建和元年立。金石録云、額題敦煌長史武君之碑。旧志作「吳郡丞武開明碑」）

である。その内容は、旧本の山東通志が、「長史武班碑」を「吳郡丞武開明碑」と記していたことの注記であろう。

それだと建和二（一四八）年になるので（開明は建和二年十一月十六日没）、金石録によつて標記を武班碑に改めたということらしい。それに対して、比較を指示されているのが、王鏊（ニラン女史が王鏊〈Wang Jian〉とするのは誤り、鏊〈Jian〉は、鏊〈Ao〉が正しい。明史卷一八一列伝六十九参照）撰の姑蘇志（四庫版）卷37／9aの、  
武開明、永和二年卒。孝廉除郎中謁者。漢建安二年遷大長秋丞長樂太僕丞。永嘉元年喪母去官。復拜郎中。除吳郡府丞。建安二年卒

である。幾つかの年号には注意が必要で、永和二年は一三七年、建安二年は一九七年（漢安二年なら一四三年）、永嘉元年は一四五年である。これらの年号を、例えば金石録所引の武開明碑の碑文と較べると、二度出てくる建安二年の内、前のそれは漢安二年を誤ったものであり、もと漢安

二年とあったらしい痕跡が、姑蘇志の「漢、建安二年」という表記に残されている。また、後ろのそれは、建和二（一四八）年が正しい。つまり王鑒（或いは、四庫版姑蘇志）は、開明の大長秋丞、長樂太僕丞に遷った年（漢安二年）と、没した年（建和二年）を、共に建安二年と誤っているのである。次に、比較指示されるのが清、凌迪知撰、万姓統譜（四庫版。Wanxing tongpu 万姓統譜）の誤り）巻78/9aの、晋に配された、

武開明 永和二 年 孝廉 除郎中謁者 歷吳郡府丞

である。武開明は晋に配されているから、その永和二年は、東晋の永和二（三四六）年を指すが（ニラン論文の Yonghe 2 (347) は、(346) の誤り）、それは、万姓統譜が後漢の永和の年号を、誤って晋の永和と取り違えただけのことである（因みに、永嘉にも、晋のそれがある）。ニラン論文注30末の、

Yonghe 1 corresponds to 346, 417, 434, or 936 CE.

も全て誤りである。永和元年は、三四五、四一六、四三三、九三五年だからである（それぞれ東晋、後秦、北凉、十国<sup>び</sup>の閏の康宗の年号）。ところで、このように誤りの多い、ニラン論文の注30は、一体何の目的で置かれているのであ

ろうか。

……He lived to the age of fifty-seven sui, dying in? 148 CE.<sup>30</sup>

という原文の主旨から考えて、それは、武開明碑に記された、開明の没年を始めとする、幾つかの年紀に対し、疑いを表するためであろう（但し、武開明碑に登場する永和、漢安、永嘉、建和の四つの年号の内、漢安（一四二—一四四）は、後漢にしかない）。ならば、その疑いは、学問的に成立しているかと言うと、そうではない。何故なら、武開明碑という一級資料（但し、原石は現存しない。金石録所引による）に対して、ニラン女史の適用した資料（山東通志、姑蘇志、万姓統譜等）がこの場合、いずれも遥かに時代の降る二級、三級資料となっているからである。そして、例えば姑蘇志等が碑文と異なる年紀を記すのは、その碑文の年紀を誤って解釈したに過ぎず、そのことは碑文自体とは何の関わりもないことで、例えば金石録所掲の碑文の一字も変えることはなさそうだ。換言すれば、山東通志以下の資料は、武開明碑の年紀に何ら疑いを挿む資料とはなり得ないということである。同じことは、武斑碑における隸釈と集古録目との関係において述べた通りであるが、比較、対照しようとするテキスト間の位相のずれをまず考慮すべきことは、本文批判（textkritik）の常識に属する事柄だろう。人の書くものに誤りは付きものだから、その

こと自体は取り立てて言う程のことでもないが、それにして、やはり小さな誤りの積み重なりが、やがて論旨そのものに疑いを招く結果となることも、事実である。この点を、ニラン論文のために惜しむものである。

次に、武梁碑に関するニラン女史の捉え方を、少し纏まった形で、検討してみる。ニラン論文二章「武梁」の主要部分と、その注<sup>34</sup>、<sup>36</sup>、<sup>37</sup>、<sup>38</sup>（両注は後半を略した）、<sup>39</sup>、<sup>40</sup>及び、注<sup>36</sup>に参照指示のある注<sup>55</sup>とを、左に掲げる。

Zhao Mingcheng remarks that he loves this inscription for its "completeness," yet of the verse encomium he quoted only twenty-eight or thirty-two characters<sup>34</sup> (four lines with eight characters each). "It is in many characters, which I do not record in full."<sup>35</sup> One authoritative version of the extant *Li shi* begins the Wu Liang entry with a six-character passage that is either out of place or interpolated from a commentary.<sup>36</sup> The lengthy inscription found in *Jinshi lu* has gone missing; only twenty-eight characters of the lengthy verse encomium are found in both the *Jinshi lu* and the *Li shi*. The *Li shi*, in commenting on the Wu Liang pictorial carvings, relates in addition the careful manner in which unidentified family members selected stones for the Wu memorial, set up an altar (*zanshan*) in back, and a worship hall (*ch'ang*) (aboveground hall for worship, thus a "shrine") in front, which were decorated by the artist Wei Gai — though the

main entry for Wu Liang does not name the artist.<sup>37</sup> Modern readers have assumed that this passage represents part of the text of the Wu Liang stele inscription, but that assumption flatly contradicts Hong's own assessment:

When speaking about funerary and burial matters, one should not be as verbose as this. The stone [attributed to Wu Liang] is not very long or wide, and since it has neither skillfully carved inscriptions nor images, not to mention nicely arranged rows, the phrases quite definitely were not composed for a stele. In mulling it over carefully, it seems that this [the aforementioned passage] refers only to the pictorial stones in the stone chamber (*shishi*) [of Wu Liang].<sup>38</sup>

If not part of the stele inscription, what was the identity of this appended passage? Certainly, if the Song epigraphical masters could not answer this question, modern scholarship will not be able to. Mei Dingzuo (1553-1619) *Donghan wenji* (Collected writings of the Eastern Han) seems to know two versions of the stele inscription, and to believe the shorter version that does not mention Wei Gai to be the "original text" (*yuan wen*).<sup>39</sup> Gu Aiji's *Li bian* (Discerning remarks on clerical-script inscriptions; compiled 1717) notes that the

Wu Liang stele, once in Jinling, is missing.<sup>40</sup>

34. Twenty-eight characters, beginning with *yide xuantong* and ending with *shennuo mingcun*, are given in the Ming Wenli and the *Siku* editions of Zhao Mingcheng. But when we look at the enclosure as quoted in *Juan 6 of Li shi*, eight characters—not four—are missing, which means that the phrase “the missing four characters” (used alike in the *Jinshi lu* and the *Li shi*) need not refer to the same four characters. As the particle *xi* can occur either in the middle of a line of verse or at the end, one cannot use its placement to decide whether the inscription should begin with the phrase *yide xuan tong*. Perhaps those four characters belong after *chuan wu jiang xi*.

35. (鑑)

36. *Li shi*, *Juan 6/14a* (vol.681, p.515). This *Siku quanshu* version matches the 1588 version (16/13a). The Wang Rixiu edition of *Li shi*, *Juan 6/13a* supplies the “full text” of the Wu Liang inscription, which is not surprising, given its provenance and dating. [The *Siku* and 1588 editions of the *Li shi* conflate parts of the Wu Liang stele inscription and Hong Gua’s commentary on the Wu Ban stele. This probably was the result of scribal omission in the Ming dynasty. A manuscript copy of two leaves from a Yuan-dynasty Taiding edition

is appended to the end of *Juan 6* in the *Sibu congkan sanbian* edition, and apparently represents the entire missing section. Based on another Ming manuscript, Wang Rixiu reinserted the text in his 1777-1778 edition. This lacuna was also noted by Mei Dingzuo (1553-1619), Fu Shan (1607-1684), and other scholars before the eighteenth century. See n.55 below. CYL and EHH]

37 Compare (Song ben) *Jinshi lu*, *Juan 14/3b*; *Li shi*, *Juan 6/14b-15b* (main text vs. commentary); and *ibid.*, *Juan 16/5a-b*. Note that Hong’s text (*Li shi 6/14a*) contains a passage of several lines, beginning *guanshou canshi* (“official lifespan cut short”), that are presented as part of the stele inscription, but they may represent commentary instead. (Wei Bo, *Ding’an leiya*, *Juan 4/20b*, repeats Hong Gua’s commentary to the Wu Liang stele inscription.) (一鑑)

38. *Li shi*, *Juan 6/15a* (vol.681, pp.515-16), gives the precise measurements of the stele: half a *xun* in length and about one *qi* wide, which I do not include in my translation. Note that the brome *tanshan* (“altar”) is typically used in connection with the imperial rituals at Mount Tai and Mount Liangfu, not for low-ranking local officials like Wu Liang. The phrase *cifang* deserves separate consideration, and it will be addressed in an essay in the symposium volume. (一鑑)

39. Mei Dingzuo, *Donghan wenji*, *Juan 28/10a-10b*. He also assumes

mistakes in copying by which the main text and commentary were conflated.

40 Gu Aiji, *Li bian*, *Juan* 7/11a, 8/15b-16a.

55 Compare *Li shi* 6/1a and 6/15a. Other questions arise: for example, why does the *Li shi* transcription of the Wu Liang stele delete the poetic *xi* (repeated four times in *Jinshi lu* transcription) in its text of the verse encomium? (The particles missing from the 1568 *Li shi* reappear in the *Siku quanshu* version.) The *Jinshi lu* comments that one of the two known versions of the rubbing is missing the last four characters, but the lacuna occurs at different points in different versions of the inscription. See n.12 above. Those rubbing the stele or copying the inscription may have sensed the problem and come up with varying solutions. One logical explanation is that Hong Gua or an unknown later source tried but failed to make sense of the verses, given that one of the two rubbings linked to Wu Liang and said to be in Zhao Mingcheng's possession began with four characters that were different. As if such confusions were not enough, the earliest extant edition of the *Li shi* (the Ming Wanli edition of 1568) inserts an additional two pages of text (labeled as *bu*, "supplement"), right in the middle of *Juan* 6, on pages 13a-b, in the all-important entry on Wu Liang, with the result that a single four-character phrase (*luo lie chenghang*) is repeated no fewer than

three times. See the Beijing Rare Books Library microfilm of the 1568 edition (mf 9101, vol.522).

(趙明誠は、彼はその「完好」きの故に、この碑文を愛すると述べている。にも関わらず、彼の引用した韻文の賛辭は、ただの二十八または、三十二文字に過ぎない(各八文字ずつの四行分)。<sup>34</sup>「多くの文字がある。私はその全てを記すのではない。」<sup>35</sup>現存する隸釈の内、一本の権威ある版は、置き違えたか、または、注釈から改竄されたかした六文字節で、武梁の記述を始めている。<sup>36</sup>金石録に備わっていた長い碑文は、失われてしまっている。非常に長い韻文賛辭中のただ二十八文字だけが、金石録と隸釈との両方に見出される。隸釈は、武梁の画像石に関する論評の中で、目下身元の知れない一族の成員が、武氏を記念する建物用の石を選び、後方に祭壇(壇埋)、前方に祭祀堂(祠堂)(廟のような、祭祀のための地上施設)を築き、それらが彫刻家の衛改によつて装飾を施されたことを、付け加え述べている——しかし、梁のための碑本文は、彫刻家の名を上げていない。<sup>37</sup>現代の読者はこの一節を、武梁碑の本文部分を表わすものと思つてしまうだろう。しかし、それは〔下記の〕洪自身による評価とはつきりくい違う。

葬儀や埋葬のことを言う場合、このように冗長であるべきではない。その「武梁に属すると考えられる」石は、そんなに長くも広くもない。そして、精密に配列された並びは言うまでもなく、巧みに彫られた彫り物や像もない所から、その句が碑のことを書いて

たものでないことは、全く明快である。それをよくよく熟考する

に、これ「前述の一節」は、「武梁」の石の部屋（石室）における、

画像石のことを専ら言っているだけの様に思われる。<sup>38</sup>

もし碑文の一部でないとすると、この付け加えられた一節の正体は、何だったのだろうか。確かなのは、もし宋代の碑文研究者がこの疑問に答えられなかったとすれば、現代の学者にも無理であるということだ。梅鼎祚（一五三—一六一九）の東漢文紀（後漢の文章を集めたもの）は、碑文における二つの型を知っており、そして、衛改のことに言及しない、短い方を、本来のもの（原文）と信じたようだ。<sup>39</sup> 顧藹吉の隸弁（隸書の碑文を「字毎に」分別して論評したもの、一七一七年編）は、かつて任城にあった武梁碑は、行方不明であると注している。<sup>40</sup>

34. 「懿德玄通」に始まり、「身没名存」に終わる二十八文字は、趙明誠の（金石録の）明、万暦版及び、四庫版によって齎されている。しかし、隸釈巻六に引用されたその賛辞を見ると、八文字——四でなく——が欠けていて、このことは、（金石録と隸釈とに等しく用いられた）「四字を欠く」という句が、必ずしも同じ四文字のことを言っているとは限らないことを意味している。接辞の兮は、賛辞の句中のみならず、句末にも使われ得るから、碑文が果して「懿德玄通」で始まっていたかどうか、その（兮の）置かれた位置によって判断することは出来ない。おそらくその四文字は、「伝無疆兮」の後に来るものだと

つたろう。

35. （略）

36. 隸釈、巻6/14a（巻6、55頁）。この四庫全書版は、一五八八年版（16/13a）と合致する。汪日秀版隸釈、巻6/13aは、予期出来ることであるが、その始まりと年紀の記入を伴った、武梁碑文の「全文」を提示している。「四庫版および、一五八八年版の隸釈は、武梁碑の一部と、洪适の武斑碑に関する注の一部とが、混じってしまっている。これは多分、明代の書写者が写し落とした結果である。元代泰定年間版からの二葉の手書き複写が、四部叢刊三編版の巻六の末尾に添えられており、一見、欠落部分全体が復原されているかに見える。別の明代写本に基づき、汪日秀は、彼の「一七七七一七七八年版において、その本文を再挿入した。この脱落は、梅鼎祚（一五三—一六一九）、溥山（一六〇七—一六八四）、そして、十八世紀以前のその他の学者達によってもまた、気付かれていた。以下の注55を見よ。

CYL and EHH]

37. （宋本）金石録、巻14/3b、隸釈、巻6/14b—15b（本文対注釈）、そして、同書、巻16/5a—bを比較せよ。洪の本文（隸釈6/14a）が、「官寿残失」（「公的な寿命は短く切られた」）に始まる何行かの節を含むこと、「そして、それらが」碑文の一部として提示されていることに注意せよ。しかし、それらはむしろ注釈を示すものである。（衛博の定庵類稿、巻4/20bは、武梁碑についての洪の注釈を復唱している。）「下略」

38. 隸釈、卷6/15a（巻80、515-16頁）は、長さ半尋、広さ約一尺という、碑の正確な寸法を提示しているが、私の訳文にはそれを含めていない。壇墀（祭壇）という用語は、泰山や梁父山における皇帝の儀式にいつも決まって用いられ、武梁のような身分の低い地方官には用いないことに注意せよ。祠堂という語は、幾通りかの考察に値する、十分な理由があり、そのことはシンポジウムの冊中の試論の中で述べられるであろう。

39. 梅鼎祚、東漢文紀、巻28/10a-10b。彼はまた、本文と注文とが混じったことによる、書写中の誤りとであると見做している。

40. 顧藹吉、隸弁、巻7/11a、8/15b-16a。

55. 隸釈6/1aと6/15aとを比較せよ。別の疑問が生じる。例えば、何故隸釈は、武梁碑を筆写する時、その韻文の贊辞中から、詩に特有の「兮」（金石録における筆写では四回繰り返されていた）を削除するのだろうか？（一五八八年版隸釈以来の接辞の消失は、四庫全書版の中に再び現われる。）金石録は、拓本の諸版として知り得た、二つの内の一つは、最後の四文字を欠くと言っているが、しかし、脱落は、異なる版の異なった点に生じているのである。上の注12を見よ。それらの拓本を取ったり、或いは、碑文を筆写したりする作業は、ひよっとすると問題に気付かせ、そして、別の解決を思い付かせたかもしれない。一つの論理的な説明は、次のようなものである。（趙明誠の）二つの拓本の内の一つが、武梁と関連し、且つ、趙明誠の所有す

るものの中、異なる四文字で始めると言われたものだと言っていると、洪适または、我々の知らない、後の資料は、その韻文の意味を取ろうと試みたが、しかし、失敗した（というものである）。そのような混乱ではまだ足りないかのように、現存する隸釈の最も早い版（一五八八年の明、万曆版）は、後から付け加えられた、「補」〔補充〕と標示される）本文二頁を挿入している。それは正しく巻六の半ば、13a-1bの頁に当たり、武梁に関する全ての重要な記載中におけるものとになる。一五八八年版の北平図書館善本書マイクロフィルム（目録9101、巻52）を見よ。）

武梁碑は原石が失われているため、その考察は専ら文献を廻るものとなる。ニラン女史がまず指摘するのは、金石録巻十四「漢從事武梁碑」の、次の記事である。全文を掲げる。

右、漢從事武梁碑云、故從事武掾、掾諱梁、字綏宗。掾体德忠孝、岐嶷有異。治韓詩、闕幘伝講、兼通河洛諸子伝記。又云、州郡召、辞疾不就。安衡門之陋、樂朝聞之義。又云、年七十四、元嘉元年季夏三日、遭疾隕霊。其後有銘云、懿德玄通、幽以明兮。隱居靖処、休曜章兮。樂道忽榮、垂蘭芳兮。身没名存、伝無疆兮。其他刻画皆完、可読文多不尽録。碑在濟之任城。余崇寧初、嘗得此碑、

愛「其完好」。後十餘年、再得「此本」、則欠「其最後四字」矣  
(宋本金石録に拠る)

また、以下問題となる隸釈卷六「從事武梁碑」の諸本を、図二に示す。図二は、それぞれ隸釈の四庫本(四庫提要に「此本為三万曆戊子王鷺所刻」と言う)、王雲鷺本(明、万曆十六(一五八八)年序刊本)、汪日秀本(清、乾隆四十三(一七七八)年刊本。今、洪氏晦木齋重刊本に拠る)となっている(図三は、参考までに掲げた、同じ三本の武

斑碑で、武梁碑はこれに続く。図四は、米国国会図書館蔵、旧北平図書館旧蔵王雲鷺本隸釈卷六、第十丁裏から十四丁表で、王雲鷺本の原姿をよく留める。女史が注55末で参照を指示した本である。国会図書館蔵北平図書館善本書マイクロフィルムへY D 175。リール番号522、コマ471-1069に拠る)。さて、ニラン論文の注34(二、三行目の、*Ming Wanli and Siku editions of Zhao Mingcheng* はおかしい。金石録の明、万暦版は管見に入らない)は、梁碑の銘「懿德玄通……身没名存、伝無疆兮」(金石録)三十二字の末尾が、金石録と隸釈とは、

……身没名存、伝無疆兮(金石録)

……身没名存、(闕四字)(隸釈)

と異なり、且つ、金石録に、「余崇寧初、嘗得「此碑」……後十餘年、再得「此本」、則欠「其最後四字」矣」と言うこと

を、問題化したものである(崇寧は、北宋の年号で、一一〇二年——一〇六年間)。そして、ニラン女史は、金石録の「欠「其最後四字」」と隸釈の「闕「四字」」とは、同じ「四字」と記されるものながら、各々指すものが違うとし、助辞の兮は句中にも使われることから(後述、注55には、王雲鷺本の銘では、金石録の四つの兮が削除されているとある)、隸釈の「闕「四字」」の四字は、「伝無疆兮」の後に続く四字を指すと主張する。私にはこの論理の運びが殆ど理解出来ない。加えて、隸釈の「闕「四字」」の四字が、「身没名存」に続く筈の「伝無疆兮」でなく、さらにその後に続く、従来、未知の四字であろうとする、ニラン女史の主張は、誠に奇矯なもののように思われる。もっと一般的な理解を示そう。それは、金石録と隸釈の四字は同じもの、即ち、「伝無疆兮」の四字を指すものである。金石録の記述から、梁碑の拓本に二つの形——銘の末尾に「伝無疆兮」四字のあるものと、ないもの——のあったことが知られよう。そして、隸釈即ち、洪适の手許にあった拓本は、後者つまり、「伝無疆兮」のないものだったらしい。洪适は、それを隸釈に記録したが、一方では、金石録によって(隸釈卷二十四所収趙明誠金石録上「從事武梁碑」、自分の拓本に「伝無疆兮」四字の欠けていることも、承知していた。だから、隸釈卷六梁碑の筆









録末尾に、「闕四字」と注したのである（この拓本には別本に存する四字が欠けている意）。梁碑の銘における、金石録と隸釈との二様の末尾については、このように捉えて、特に矛盾はないように思う。

次に、ニラン論文が、

One authoritative version of extant *Li shi* begins the Wu Liang entry with a six-character passage that is either out of place or interpolated from a commentary.<sup>36</sup>

と言うのは、四庫版隸釈のことであるが、具体的にはそれは、

#### 従事武梁碑

官寿残失。威宗建和之元年、開明為<sup>A</sup>其兄立闕。刻其<sup>D</sup>成行、攄<sup>D</sup>騁技巧、委蛇有章。垂<sup>E</sup>示後嗣、万世不亡。其辞曰、

懿德玄通、幽以明兮。隱居靖处、休曜章兮。業道忽榮、垂蘭芳兮。身歿名存、闕四字

と記されたものである（図二の四庫本参照。威宗は、後漢の桓帝の廟号）。まず、begins……with a six-character passage が分らない。右を見ても、六文字節はない。それはそれとして、上記の四庫本隸釈（及び、王雲鷺本）の梁碑に関する記述は、ニラン論文も置き換え、注釈からの改竄を疑うように、全く訳の分らないものとなっている。

それは、汪日秀本と較べてみれば明確のように、四庫本（及び、王雲鷺本）のAは、武斑碑の注釈の一部に外ならず、続くDが、武梁碑の記述の内の本文の末尾（その後さらに注釈が続く）となっているためである（図二参照）。ニラン論文の注36を見ると、このことが指摘されている。

その事実から、四庫本、王雲鷺本の梁碑の記述の不完全極まりないものであることが確認出来る。即ち、四庫本、王雲鷺本の梁碑の記述は、冒頭に他注（斑碑の注の一部）を混じ、本文の前半を欠くのである。同時に、四庫本、王雲鷺本の武斑碑の記述が、その注釈の後半（図二のB）を欠く、これも不首尾なものとなっていることを、ここで確かめておきたい（図三の斑碑参照。さらに斑碑の注末尾へAも、次の梁碑の冒頭へ回されている。見方を変えれば、四庫本、王雲鷺本の「従事武梁碑」標題が、斑碑注の末尾に移ったと見ることも出来る）。ニラン論文の武梁を廻る見解に関し、私が不思議に思うのは、例えばニラン女史が終始、上述の如く非常に不完全な四庫本、王雲鷺本を拠り所とし、殆どと言って良い程、汪日秀本を顧慮しないことである。具体的に見てゆく。例えば注36において、ニラン女史は次のように述べている。

A manuscript copy of two leaves from a Yuan-dynasty Taiding edition is appended to the end of Juan 6 in the Sibu congkan sanbian

edition, and apparently represents the entire missing section. Based on another Ming manuscript, Wang Fixiu reinserted the text in his 1777-1778 edition.

女史がまず述べるのは、四部叢刊三編所収の隸釈即ち、王雲鷺本のこと、それが十三丁の次に元、泰定（一三二四—一三二八）年間版を補入（図二王雲鷺本のB、C。右欄外下に「拋泰定本」写補」とあり、版心丁付に「十三補」とある）することである（to the end of Juan 6はおかしい。巻六の終わりに添えられている訳ではない）。訝しいのは、女史が汪日秀本の武梁碑の記述を、そのような王雲鷺本を前提として、再挿入（reinsert）したものと述べることである。さて、汪日秀の基づいた本は、その跋に、余従「金閭」借「得伝是楼鈔本」。悉心讎勘、較「之明季鏤版」、大相径庭

とあって、清、徐乾学の蔵書（伝是楼）中の写本であったことが分かる（金閭は、蘇州の通称。徐乾学の生地）。そして、それは「明季鏤版」（万曆刊行の王雲鷺本であろう）と大きく異なる本で、何より特に、武梁碑についての記述が、両書の間で異なっていたことも、汪日秀自身が正しく、

至「武梁碑」、明刻脱「去碑」、止存「其末数語」。及「銘文」而誤以「武斑碑」文「闌入」。又欠「其後一段」。（跋）

と指摘している通りなのである。故に、汪日秀本は、梁碑の記述を再挿入した訳ではない。成程汪日秀本は、刊行時期こそ降るが、例えば梁碑の記述に関し、四庫本、王雲鷺本と較べ、特にそれを斥けなければならない理由は、何ら見当たらないように思われる。それどころか武梁碑の場合、むしろ逆に、汪日秀本の方が四庫本等より、格段に優れているものと判断されるのである。例えば王雲鷺本（四部叢刊本）におけるB、Cの補入の背景を考えてみよう。その補入は見易いものではあるが、本文を復原するためには、ABCDEの順序を辿らなければならないことを考えると、大変分かりにくい、不親切なものとなざるを得ない。それはさて置き、王雲鷺本の補入を、A—Eの順に理解すべきことは、何処から分かるのであろうか。それは、BCに用いられた泰定本の記述からであらう。おそらく泰定本のA—Eとなっていたことが、王雲鷺本における、BCの補入の根拠なのである。そして、汪日秀本は、その泰定本と同じ記述を有しているのであって、そのことは、汪日秀本が王雲鷺本より優れていることの証左と見られよう。にも関わらず、ニラン女史の如く、優れた汪日秀本を斥けて、極めて不完全な四庫本、王雲鷺本に固執すれば、論旨が狭く、奇矯な方向へと向かうことは、やがて避け難いものとなるだろう。

#### 四

ニラン論文注36の終わりに、さらに後注、注55への参照指示がある。ここで、その注55を検討しておく。注55は、西闕銘を論じた一文、

The rubbing for the Wu Kaining stele has gone missing, just as the rubbing for Wu Rong has reappeared.<sup>55</sup>

(武榮碑の拓本が再現された丁度その時、武開明碑の拓本は行方不明となった。<sup>55</sup>)

に対するものだが、例によって、その冒頭、

Compare Li shi 6/1a and 6/15a.

の意図が不明である。さらに注55は、前掲金石錄卷十四の銘における、四つの「兮」が、隸釈では削除されていると主張するが、それらの「兮」は、隸釈の四庫本、王雲鷺本、汪日秀本のいずれにあつても、削除はされていない(もつとも、四つ目の兮は、隸釈に「伝無疆兮」句がないため、当然不見)。従つて、以下の注55における、

but, the lacuna occurs at different points in different versions of the inscription.

という説は成り立たないし、同時に前述、「伝無疆兮」の後に、未知の四字句があつたとする想定も、やはり成立しないことになる。続く、See n.12 above.の参照指示も、

甚だ理解し難いものである。それは、武斑を論じた一文、Zhao could also make out both characters of Wu Ban's style name,

Xuanzhang;<sup>12</sup>

(趙はまた武斑の字、宣張の二字を判読することも出来た。<sup>12</sup>)

に対する、

12. Gu Aiji, *Lbian* (Siku edition), juan 7/12a, points out that it is very unusual for a Han stele to provide both the family and style name of the individual.

(12・顧藹吉の隸弁(四庫版)、巻7/12aは、漢の碑文において、個人の姓と字との両方を記すことは、極めて異常なことだと指摘している。)

と言う内容の注となっている。私にはこの注が、「闕」四字(隸釈)の問題とどう関わっているのか、皆目分らない。加えて、その注自体が間違っている。注12は、隸弁巻七の、

後有題名六人、其一曰、防東長斉国臨菑□紀伯允書「此碑」漢碑有「書人姓字」者絕少。惜闕「其姓」

を指すが(丁数は12aでなく、12b)、隸弁は、ニラン女史が言うような、斑碑において武斑の姓と字とが記されていることを問題としているのではない。隸弁が指摘しているのは、漢代の碑文で、碑文を書いた者(書人)の姓字を記す例が、極めて少ないということなのである(斑碑には、

上引「書」此碑」の後に、なお「嚴祺字伯曾」五字があるが「隸釈」、この部分の斑碑の解釈は非常に難しい。例えば高文氏は、翁方綱の兩漢金石記卷十五に、「小欧陽集古録目云、嚴祺字伯魯、隸書。今不見此文」久矣。据洪氏隸釈載「是碑末云、紀伯允書此碑。下乃云、嚴祺字伯曾。曾魯二字未知孰是。然驗其文勢、則書者紀伯允而非嚴祺也。紀伯允三字上有闕文。或是□紀伯允、則紀字是其名、伯允是其字、未可知也。今不能臆定矣」と述べるのを引いて、参考としている「漢碑集釈」「武斑碑」注六一、河南大学出版社、一九九七年。とは言え、注12と注55の關係は、やはり判然としないことに変わりはない。強いて想像すれば、相互対照を意図した、注36または、34の誤りだろうか。さて、注55の、*One logical explanation is that*以下の仮説も、無効である。さらに *As if such confusions were not enough* 以下の批判も、上記王雲鷺本（四部叢刊本）の補入の分かりにくさ、不親切さを指摘したに過ぎず（汪日秀本には当て嵌まらない）、例によってこれまた、武梁碑文とは関わりのない事柄である。並びに、「羅列成行」の三回繰り返されることは、王雲鷺本では非常に捉えにくい順序となっているが、それも汪日秀本に就けば、本文に一度記された「羅列成行」を、洪适が注釈の中で二度繰り返した結果に過ぎないことが、

直ぐに分かる。

ニラン論文の本文へ戻る。

The lengthy inscription found in Jinshi lu has gone missing; only twenty-eight characters of the lengthy verse encomium are found in both the Jinshi lu and the Li shi.

この主張は、非常に奇妙である。金石録における the lengthy inscription は、具体的には、

(一) 漢從事武梁碑云、「故從事武……諸子伝記」

(二) 又云、「州郡召……朝聞之義」

(三) 又云、「年七十四……遭疾隕靈」

(四) 其後有銘云、「懿德玄通……伝無疆兮」

の四つを指している。そして、金石録と隸釈とに共通する二十八字とは、(四)のことだから、失われてしまった has gone missing 金石録の長い碑文というのは、(一)(二)(三)のことになる。(一)(二)(三)は全て、(四)のCにあるもので、B Cを欠く四庫本、王雲鷺本に、それらが見当たらないのは当然だろう。しかし、それらが四庫本、王雲鷺本に見えないからといって、隸釈からそれらが失われてしまったことにはならないのである。何故なら、(一)(二)(三)は全て、汪日秀本に備わっているからである。金石録との間に示される、その事実も、欠落のある四庫本、王雲鷺本より汪日秀本に就くべきことを、何より有弁に物語る例であろう。また、

汪日秀本が(一)(二)を含みつつ、金石録よりさらに長く碑文の本文を録することに関しては、趙明誠自身が「可読文多不<sub>レ</sub>尽<sub>レ</sub>録」と、金石録における省略を明言していることと、冒頭の「漢從事武梁碑云」の引用の後、「又云」「又云」「其後有<sub>レ</sub>銘云」等の言わば引用符が、それらの間の節略を半ば明示していることを、考え併せなければならぬ。そして、記し方は各自、二様ながら、趙明誠と洪适は、同じ拓本を見ていた可能性が極めて高いと言える。さて、ニラン女史が、金石録、隸釈共通の碑文を、二十八字のみに限るのも、大きな欠落を抱える四庫本、王雲鷺本に固執した結果である。

.....by the artist Wei Gai—though the main entry for Wu Liang does not name the artist.<sup>37</sup>

も、四庫本(王雲鷺本)に依拠することによる誤りである。衛改の名は、その欠落部の碑文本文に含まれている(図二、王雲鷺本C。また、汪日秀本参照)。なお衛改に関しては前述、薌他君石祠堂石柱を、再び想起したい。その注37も、納得し難い点が多い。Compare (Song ben) jinsu lu, juan 14/3b: Li shi, juan 6/14b-15bの丁数表示もおかしい(14/3b不明、10b-11aか。6/14b-15bは、6/14a-15aが正しい)。そして、

Note that Hong's text (Li shi 6/14a) contains a passage of several

lines, beginning *guanshou canshi* ("official lifespan cut short"), that are presented as part of the stele inscription, but they may represent commentary instead.

も、極めて不正確な主張となっている。「官寿残失」以下が、まるで梁碑についての本文の如く、また、注釈のようにも見えるのは、欠落のある四庫本(王雲鷺本)の表記の曖昧さに起因するのであって、そのような紛れは、汪日秀本には認められないからである。それよりむしろ問題なのは、「官寿残失……立闕刻其」を梁碑に関わるものの如く扱う女史の筆致で、ここは何よりもまずそれを斑碑の注釈の混入と認め、「成行攄騁……身歿名存」を、梁碑本文の後半末尾に相当するものと判断することが、重要であろうと思われる。この想定がないため、ニラン女史は、「成行攄騁……身歿名存」をも洪适の注釈と見做すという、大きなミスを犯す結果となっている。だから、

Wei Bo, *Ding'an leiqao*, juan 4/20b, repeat Hong Gua's commentary to the Wu Liang stele inscription.

も、およそ事実に対する指摘になってしまふ。定庵類稿卷四の、

按「從事梁碑」云、前設「壇墀」後建「祠堂」。良匠衛改雕「文刻」画、羅「列成行」、攄「騁技巧」、委蛇有「章」。似「謂」此画、



は、「按」從事梁碑「云」と言うことから明らかなように、梁碑の本文を引いているのであって、洪适の注釈を引く訳ではないからだ（末尾四字のみが洪适の注に似る）。

さて、ニラン女史は、梁碑の本文「孝子仲章」以下ないし、「良匠衛改」以下を、洪适の注釈と見做し、それらが隸釈（王雲鷺本、汪日秀本）において、恰も本文のように見えることを批判する。そして、それを否定する根拠として洪自身の評価 Hong's own assessment を上げ、それらを碑文の本文と見ると、その評価の内容とく違つてしまふと述べている。女史の言う、その評価とは、隸釈の注釈における

若曰「松萩窀穸之事、不<sub>レ</sub><sub>レ</sub><sub>レ</sub>辭費如<sub>レ</sub>此。此碑長不<sub>レ</sub>半尋、広纔尺許。既无<sub>レ</sub>雕画技巧、亦非<sub>レ</sub>羅列成行。其辭決不<sub>レ</sub>為碑設也。詳<sub>レ</sub>味之、似<sub>レ</sub>是指<sub>レ</sub>石室画像爾を指すが、この記述は、例えば「良匠衛改」以下を、碑文の本文と見ることと本当に矛盾しているのであろうか。一般的に考えれば、そうは言えないだろう。「若曰」松萩窀穸之事、不<sub>レ</sub><sub>レ</sub><sub>レ</sub>辭費如<sub>レ</sub>此（もし墓地や埋葬のことを述べるのであれば、このような冗長な言い方をすべきではない。松萩は、埋葬、窀穸は、墓地の意）の一文が、矛盾に該当しように思えるが、この一文は、直接的には梁碑の「良匠衛改」以下の意味内容、指示するものを問うている

のであり、延いては、それが通常ではないことを述べているのであって、「良匠衛改」以下を碑文の本文と見ることと、決して矛盾している訳ではない。さらに、上掲隸釈の記述自身は、それらを碑文の本文と見ていることが、自ずと明らかで、もしそうでないならば、その記述は、全く意味をなさないものとなるだろう（注38の、壇<sub>だん</sub>壇<sub>だん</sub>に関しては、一考の余地がある）。従つて、隸釈の「孝子仲章」以下や、「良匠衛改」以下などは、女史が主張するように、付け加えられた appended ものではないし、況んや、その正体 identity については、およそ問うまでもないことである。

次いで、ニラン女史は、明、梅鼎祚の東漢文紀卷二十八「從事武梁碑」を引いて、梅鼎祚が梁碑の二つの型（四庫本等と汪日秀本）を知っており、その内の短い方（即ち、四庫本、王雲鷺本）を、本来のもの（原文）と認めたこと述べている。また、注39において、梅鼎祚がその短い方を、書写中に誤つて、本文と注文を混じえたもの、と見做したとも述べている。その東漢文紀を示せば、次の通りである（「從事武梁碑」と題し、四庫本、王雲鷺本系の隸釈全文を引用しているが「碑文本文の冒頭四字を」、「官<sub>くわん</sub>壽<sub>しう</sub>」と改め、下を二、三字分の空格とする。また、碑文本文「刻其」の下、「成行」の上に小字の「闕」を置く、今、省略に従う）。

○鼎按「此釈」、乃碑原文、今本首有「官寿残失四字」。必洪後并失「前文一段」。校刻者写「此四字於首」、抄伝者誤混「大字」耳。刻其下有「闕文」。而孝子孝孫至「羅列一段」、則在「成行之上」也。

梅鼎祚の言う所は、頗る明快である。ただ論旨が少し複雑なので、それを簡条書きにして示す。

(一) 梅鼎祚の見た隷釈（「今本」と呼んでいる）は、四庫本、王雲鷺本系であり、汪日秀本系ではない（図二参照）。従つて、その梁碑の記述は、「官寿残失」で始まる。

(二) 洪适の時代には、その「官寿残失」の箇所（即ち、「威宗建和」の前）に、梁の官寿を記した「前文一段」があつただろう。

(三) その前文は、洪适以後、きつと他の部分共々、失われたに違いない（梅鼎祚は、「威宗建和」の前に二、三字分の空格を設ける）。

(四) 隷釈の刊行時、その校訂担当者（「校刻者」）が、梁の官寿を記している筈の、冒頭前文の欠落に気付き、その位置に、碑文本文と区別すべく、小字を用いて、「官寿残失」という、四字の注記を書き入れた。

(五) ところが、刊本が転写され伝流してゆく過程にあつて、書写者（「抄伝者」）の何人かが、冒頭の「官寿残失」

を、碑文の本文と誤解して、大字で書写し、それを本文に混入させてしまふ（四庫本、王雲鷺本がこの形を取る。梅鼎祚は、それを小字に復し、「官寿残失」の割注として、「威宗建和」上の空格の前へ置く）。

(六) 碑文の本文「刻其」の下、「成行」の上にも、欠文が存する（梅鼎祚は、そこにも、小字の「闕」を補つている）。

(七) 隷釈を注意深く見るならば、その欠落は、注文に引かれた碑文本文から、復原することが出来る。それはおそらく、「而其後云」に引用された、「孝子孝孫」から「羅列」までの一段だろうと考えられる。だから、注文中のその一段を、本文の「刻其」と「成行」の間に補えば、欠落を復原したことになる。

梅鼎祚の言う所は、大体汪日秀本の内容と一致しており、その読解力の深さには、流石と思わせるものがある。但し、梅鼎祚は、「官寿残失」また、「威宗建和……立闕刻其」が武斑碑の注文であることを見抜けず（東漢文紀の梁碑の前には、斑碑に関する記述がある）、それを梁碑の本文に属せしめている点や、隷釈の注文である「孝子孝孫」を本文と認めている点（「孝子孝孫」は、碑文「孝子仲章季章季立、孝孫子儁」を、洪适が略記したもの。汪日秀本参照）から判断されるように、梅鼎祚が汪日秀本系の隷釈を参照

していたとは考え難い。もし梅鼎祚が汪日秀本系の記述を知っていたなら、決して(一)―(七)のような、緻密で手間の掛かる考証をする必要はなかったであろう。知らなかったからこそ、四庫本等の系統の範囲内で、何とかそれを正しい形に近付けようと苦心したのである。さて、(一)―(七)を見ると、ニラン女史は、東漢文紀を全く読み損っていることがよく分かる。例えば梅鼎祚は、梁碑の記述における二つの系統を知っていた訳ではないし、ましてその一方(四庫本等)を、本来のものと認めた事実もない(東漢文紀の「原文」という語は、女史の想定するような意味で使われているのではない。それはただ、梅鼎祚が注文と区別して、碑の本文のことを、そのように呼んだに過ぎない)。また、注39において、女史が述べていることにも、実際の東漢文紀との、大きな隔たりが認められる。東漢文紀は、「官寿残失」の四字を、注釈とただけである。それを含む一行(「官寿残失……立闕刻其」。これは、実は斑碑の注であった)を注釈としたのではなく、或いは、以下の数行を、注釈としたでもないことに、注意しなければならぬ(注37において、女史は、「官寿残失」に始まる何行かの節は、注釈であろうと述べていた)。訝しいことに、このような、およそ学問的とは言いがたい、不条理極まる東漢文紀の引用を敢えて行ってまでニラン女史は、一体何を主張しようとしたのであろうか。女史の主張の狙いは、まず四庫本、王雲鷺本を隷釈の正統な本文と位置付けること(即ち、汪日秀本を斥けること)であり、次いで、四庫本、王雲鷺本の本文内容に対し、疑問を提起することであつたように思われる。そして、後者は例えば先々、

*If all the passages attributed to Hong were indeed composed by him, which seems doubtful,……(p.526)*

(もし、洪に属すると考えられる全ての引用部分が、実は彼によって創作されたものだとしたら、それは疑わしいが、……(528頁))

と総括される、梁碑のみならず、武氏祠に関連した、五つの碑文全ての歴史資料性を否定し、そこから従来の武氏一門の概念を解体しようとする、女史の結論を支えるものとなっている。

換言すれば、ニラン論文の二章「武梁」を通して指摘し得ることだが、東漢文紀の引用に限らず、それらの目的は、総じて梁碑の「良匠衛改」以下また、「孝子仲章」以下(金石録不見)、或いは、BCなどを注釈、付加、改竄、挿入と規定することで、前述の如く四庫本、王雲鷺本を擁護すること、即ち、汪日秀本を斥けることにあつたと考えられる。そもそも武梁碑は、原石が失われており、その存在は、文献上にしか根拠をもたない、半ば仮構ともすべき、甚だ危ういものである(幸いなことに、私達には、汪日秀

本が残されているが——)。そして、ニラン女史のように、汪日秀本を視野に入れず、四庫本、王雲鷺本のみに固執して、梁碑を論じようとするならば、そこから導かれる結論は、先に見た通りの四庫本、王雲鷺本のもつ、極めて重大な欠陥故に、必然として私達の前提としてきた梁碑の歴史資料性の否定、さらに武梁という人物概念の解体へと、向かうことにならざるを得ないだろう。さて、梁碑に関する、ニラン女史の筆致からは、しばしば目前の事実を無視する、非常に頑なな印象を受ける。女史は何故、汪日秀本を斥けようとするのだろうか。もしかすると、武梁碑の存在自体を否定しようとする、結論が先にあつたのだろうか。事実を離れて理屈に奉仕する論証は、所謂イデオロギーの名で呼ばれ、もはやそれを学問と呼ぶことは許されまい（注40の、隸弁卷7/11a、卷8/15b-16aの丁数表示は、卷7/15b-16aへ武梁碑、卷7/12a-bへ武班碑の誤り）。

## 五

西關銘は、金石錄卷十四に、「漢武氏石關銘」としてその銘文全文が録されて以来、内容が知られるようになったもので、武氏祠関係の五つの碑文の内、最後の五つ目にあつてゐる。原石は、黄易の修武氏祠堂記略に、

双關南北對峙、出<sub>レ</sub>土三尺。掘<sub>二</sub>深八九尺、始見<sub>二</sub>根脚

## 各露<sub>一</sub>

と記す如く、東關に相對するものとして、乾隆五十一（一七八六）年に黄易により、現存が確認された。今、その銘文を示せば、次の通りである（改行は拓本及び、原石に従うが、字体は通行のものに改める。また、句読点、返り点を付した銘文を添えておく）。

建和元年大歲在丁亥三月庚戌朔四日癸丑孝子武始公弟綏宗景興開明使石工孟孚李弟卯造此關直錢十五萬孫宗作師子直四萬開明子宣張仕濟陰年廿五曹府君察孝廉除敦煌長史被病笑沒苗秀不遂嗚呼哀哉士女痛傷

（建和元年大歲在丁亥、三月庚戌朔四日癸丑、孝子武始公弟綏宗景興開明、使石工孟孚李弟卯造此關、直錢十五萬。孫宗作師子、直四萬。開明子宣張、仕濟陰。年廿五、曹府君察孝廉、除敦煌長史。被病笑沒、苗秀不遂。嗚呼哀哉、士女痛傷）

最後に、この西關銘についてのニラン女史の見解を検討する。女史は、二章のThe pillar-gate inscription（西關銘）と題する節において、左のように述べてゐる。

Be that as it may, the pillar-gate inscription ends with four sentences devoted to Wu Ban (i.e., about half the entire text), whom convention identifies as Kaiming's son. Why would "filial sons" erect a memorial gate whose inscription gives no information about the older generations but focuses instead on a single member of the younger generation? A more general question may be lodged: why do later traditions reflect so much confusion about the identity of the makers and dedicatees of the pillar-gates, if those identities were plain for all to see? Furthermore, a second passage, this time in the *Li shi* entry for Wu Liang, says that Wu Kaiming erected the pillar-gates for his elder brother, Wu Liang—a statement flatly contradicting the pillar-gate inscription transcribed in *Jinshi lu*, which has Wu Kaiming and his three brothers, as "filial sons," erecting the gates.<sup>46</sup> (Readers will recall that the *Li shi* does not itself contain a transcription of the pillar-gate inscription.) According to the standard genealogy devised for members of the family, Wu Kaiming died three years before his elder brother Wu Liang, in which case we must either credit Kaiming with astounding prescience in building the pair of pillar-gates or presume that they were not erected in a funerary context. But the very materiality of the pillar-gate inscription, which was readily decipherable at the turn of the twentieth century, as the volumes of Chavannes and Sekino attest, has ap-

parently precluded any consideration of these internal contradictions. (As the inscription has now been rubbed entirely away, we must rely upon these photos.) We do know that Fang Ruo's (1869-1954) *Jiaobei sulbi* (*Notes comparing steles*) records that existing rubbings of the pillar-gate inscription present markedly different carving styles and formats, "with not a single stroke in a similar place."<sup>47</sup> The *Jinshi suo* (*Index to metal and stone carvings*; compiled 1821) shows an inscription with six lines per column, but Fang's text records an inscription with twelve lines per column.<sup>48</sup>

46. *Li shi* 6/14a (vol.681,p.515). Hypothetically, two sets of pillar-gates could have been built in the single cemetery, one set sponsored by four filial sons for their parents, and one set by Wu Kaiming for his older brother, but this seems unlikely.

47. Fang Ruo, *Jiaobei sulbei* (Shanghai: Shanghai shuhua chubanshe, 1981), *juan* 1/9a.

48. Compare *ibid.*, and Feng Yunpeng and Feng Yanyuan. *Jinshi shuo* (Shanyang: Ziyang Xian shu cang ban, 1821), "Shisuo," *juan* 3/3a.

a. (ふすまにせつ 西關銘は、武班に捧げられた四つの文で終わっている(即ち、全体の約半分)。これまでこの慣らわしては、彼は開明の子とされている。何故孝子達は、その碑文が前世代の人々に

関する何の記事も含まず、代わりに、より若い世代の一人の成員に焦点を当てたような、記念の關を建てようとしたのだろうか？ もっと一般的な疑問を提示することも可能である。もしその由来が誰の目にも明らかだったのであれば、後世の伝承が何故、西關の記録者及び、被奉皇者は誰だったのかという判断をめぐり、かくも多くの混乱を招いているのだろうか？ その上、今度は、隸釈の武梁碑の記載における第二節は、武開明が兄武梁のために、その關を建てたと言っており——その記述は、武開明と彼の三人の兄弟に「孝子」として關を建てさせている、金石録に筆録された西關銘と明らかに違い違う。<sup>46</sup>（読者は、隸釈がそれ自身としては、西關銘の筆記をもたないことを思い出すだろう。）その家族の成員を考案した、標準的な系図によると、武開明は、彼の兄武梁より、三年早く死んでいる。今の場合、我々は、開明が驚くべき予知能力を用いて、一組二柱の關を建てたと信じるか、それとも、それらの關は、埋葬用に建てられたのではない、と推定するかしなければならぬ。しかし、西關銘の原石は、シャヴァンヌと関野の書物にある通り、二十世紀への移り目には、容易に判読し得るものであったけれども、現在ではこれらの内部矛盾に関する、如何なる考察を行うことも、外見的には難しい。（銘文は、現状においては完全に摩滅してしまっているので、我々はこれらの写真に頼らざるを得ない。）我々は、方若（一八六九—一九五四）の校碑隨筆（碑文を比較した注釈）が、西關銘の現存する拓本は、彫刻の様式や構成において、際立った異同を示す、即ち、「一筆として似た所がない」と記

すことを、知っているではないか。<sup>47</sup>金石索（金石彫刻の索引、一八二一年編）は、一行六字の銘文を掲げ示しているが、しかし、方の本文は、銘文が一行十二字で書かれていると記すのである。<sup>48</sup>

46・隸釈 6/14 a（巻80、55頁）。仮定として、二組の關が一つの墓地に建てられることも、可能だったろう。一組は、四人の孝行息子による、彼らの両親（達）のためのもので、そして、一組は、武開明による彼の兄のためのものであった。しかし、これはありそうもない。

47・方若、校碑隨筆（上海、上海書画出版社、一九八一年）、巻1/9 a。

48・前掲書と比較せよ、そして、馮雲鵬と馮雲鵠、金石索（番禺、滋陽、署藏板、一八二一年）、『石索』、巻3/3 aとも。）

ニラン女史の叙述によると、西關銘は恰も合理的に説明することが可能なものの如く、殆ど出鱈目な内容をもつ資料であるかのような記され方をしている。西關銘をめぐる、かくも多くの混乱 *so much confusion* の内実は、後程整理を試みるが、まず女史の指摘について、一、二の補足、訂正を加えておく。

ニラン女史の言う、隸釈の武梁碑における a second passage とは、上記四庫本、王雲鷺本巻六「從事武梁碑」冒頭の、

官寿殘失。威宗建和之元年、開明為其兄立關を指すが、これは前述の通り、実は武梁碑の碑文ではなく、

武梁碑に対する洪适の注文の一部であつたことに注意したい（図二、汪日秀本参照）。それが武梁碑のものとされてゐるのは、例によつて女史が専ら四庫本、王雲鷺本に拠つた結果に外ならない。皮肉なことに、ただでさえ混乱を招きがちな西闕銘に、誤りを含む四庫本、王雲鷺本を関連させる女史の不用意さが、ここでは本当の混乱を惹き起している。武斑碑注の問題は、後述する。

さて、ニラン女史は、上掲論文の終わりに、校碑隨筆と金石索の二つの文献を引いて、拓本批判を通した西闕銘批判を行っているが、その批判は、果して正しいのであろうか。ここで、その当否を少し考えておく。女史が援用した方若の校碑隨筆卷一の原文を示せば、次の通りである。

武氏石闕銘。隸書八行、行十二字、上層画像。在「山東嘉祥」。建和元年三月。

拓本非難致、不過道光以後拓本無旧拓清晰。乃近有摹刻竟無一筆似処、且每行作十字、是并原拓整張未見者耳

方若が、「無一筆似処」と述べたのは、西闕銘の拓本に關してではなく、その「摹刻」であることに注意しなければならぬ。だから、女史がそれをexisting rubbingsのこととするのは、全くの見当外れとすべく、従つて、女史による校碑隨筆の引用は、西闕銘はおろか、その拓本の批判

にさえなり得ないことが、了解されるだろう。

石索の引用についても、ほぼ同じことが言える。成程、石索卷三「漢武氏祠石闕」に、四葉に分けて掲出された図版は、行六字、十六行に亙つていて（四、五、五、二行。末行のみ三字）、西闕銘原石並びに、その拓本とは大きく異なっている。しかし、その図版は、当然のことながら、拓本なのではない。図版の元は拓本であらうが、版本化された段階で、それは改めて彫り直され、拓本とは質的に異なつたものとなつてゐるのである。そして、原拓が版面に合つていなければ、版面に合わせてそれを適宜改変することとは、珍しくも何ともない現象で（例えば容庚の『漢武梁祠画像録』十、十一丁は、銘文の原拓を収めるものではあるが、やはりそれを各三行の四葉に分け、十二行、行八字〈末行五字〉に改変している）、書誌学（bibliography）の初歩的知識に属する事柄である。加えて、女史が方若を引いて石索を批判するのは、さらにおかしい。何故なら、石索の図版四葉目左に、

闕高一丈二尺、半淤于土。此銘在西闕之第六層。

予掘出土、字拓之。銘八行、々十二字、末行九字

とあつて、原石が八行、行十二字であることは、方若を俟つまでもなく、石索自身が明記していることだからである。故に、女史の石索の引用もまた、西闕銘やその拓本の批判

としては、全然的な外れなものとなっている。要するに、これらのこともまた、例によって前述、資料の位相を無視した結果に外ならず、ニラン女史が引く校碑隨筆や石索は、西關銘やその拓本に対し、本文批判の地平において、何ら関わりをもたない資料であることは、改めて確認するまでもないことだろう。

さて、西關銘は、例えば作者や被奉呈者の問題で、ニラン女史が言うように、本当に混乱しているのであろうか。確かに西關銘の内容を資料として見る時、他資料との関係が聊か複雑なことは、否定出来ない事実だろう。しかし、複雑であることと混乱していることは、明らかに違う。そこで、以下、ニラン女史とは別途、もう少し一般的な観点から、西關銘と他資料との関連を整理してみる。西關銘をめぐる関連事項を年表風に纏め、左に一覧として示す。

145 (永嘉元年) 開明母没 (開明碑)

斑没 (斑碑)

147 (建和元年) 2・23 斑碑を建てる (汪日秀本隸釈斑碑

注)

3・4 開明、兄梁のために關を建てる

(汪日秀本隸釈斑碑注)

3・4 武始公等兄弟四人、關を建てる

148 (建和二年) 11・16 開明没 (開明碑) (西關銘)

151 (元嘉元年) 6・4 梁没 (梁碑)

167 (永康元年) 頃 梁没 (梁碑)

まず、ニラン女史が、明らかに違い違っている flatly contradicting と指摘する、隸釈卷六と金石錄 (西關銘) とは、本当に違い違っているのだろうか。金石錄卷十四は、西關銘 (の拓本) と一致しているから、問題となるのは隸釈である。女史の言う隸釈のそれが、四庫本、王雲鷺本卷六「從事武梁碑」冒頭に記された第二節、

官寿殘失。威宗建和之元年、開明為其兄立關

の傍線部であり、また、それが汪日秀本 (泰定本) の斑碑における、洪适の注釈の一部であることは、既述の通りである。その本文を改めて確認すれば、左の如くである (汪日秀本)。

敦煌長史武斑碑

建和元年大歲在丁亥、二月辛巳朔廿三日癸卯、長史

同缺下

敦煌長史武君諱斑、字宣張 (碑文下略)

右、敦煌長史武君之碑、隸額在「濟州任城」。武君名斑、字宣張、從事梁之猶子、吳郡府丞開明之元子、



執金吾丞榮之兄也。以<sup>二</sup>冲帝永嘉元年<sup>一</sup>卒。碑者、後三年、同舍郎史恢曹芝六人所<sup>レ</sup>立。字小石損、官寿殘失。威宗建和之元年、開明為<sup>二</sup>其兄立闕<sup>一</sup>。刻<sup>二</sup>其傍云宣張仕濟陰<sup>一</sup>。年二十五、曹府君察孝廉、除<sup>二</sup>敦煌長史<sup>一</sup>。被<sup>レ</sup>病夭歿、苗秀不<sup>レ</sup>遂。闕以<sup>二</sup>二月癸丑<sup>一</sup>作、碑以<sup>二</sup>二月癸卯<sup>一</sup>立。相去浹辰之間〔下略〕

右は、汪日秀本であるが、泰定本（また、現存分の王雲鷺本）も異同はない。斑碑が「建<sup>和</sup>元年太歲在丁亥」で始まっていたらしいことは、歐陽脩の集古錄卷三（「首書云」とある）や斐の集古錄目一（雲自在龕叢書本）に、早くから記載された事実で（金石錄には言及がない）、斑碑の本文は実際、建和元（一四七）年の斑碑の制作を記すことから、書き始められていたのだろう。武斑は永嘉元（一四五）年に亡くなっているもので、それは二年後のことであった（上掲の斑碑注に、「後三年……所立」とする）。そして、右の斑碑注において、第一に問題となるのが傍線部、**威宗建和之元年、開明為<sup>二</sup>其兄立闕<sup>一</sup>**

と記されていることで、兄は、武梁を指している（斑碑注の猶子は、兄の子つまり甥のことで、元子は、長子の意）。すると、この闕は、同じ建和元（一四七）年に作られた西闕銘と、一体どういう関係にあるのだろうか。次に問題と

なるのが波線部、その闕に彫られていたと思しい、「宣張仕<sup>二</sup>濟陰<sup>一</sup>」以下の句であらう（濟陰郡は、山東省曹県西北）。この「宣張」云々の句は、全く同じものが西闕銘に見えており、それは大体、何を意味するのだろうか。二つの問題の内、前者が即ち、ニラン女史により、金石録との違いを指摘された問題に当たっていて、女史はその前提として、斑碑注に言う闕を、西闕銘と考えていることが分かる。ここで、西闕銘を論じるニラン女史の立場を確認したい。不思議なことに前者、つまり隸釈の斑碑注を上げて、その金石録とのくい違いを鋭く追及する女史が、どういう訳か、後者の問題には触れようとしないのである。その理由を慮るにやはり、女史が四庫本、王雲鷺本に拠ったことだろうと思われる。何故なら、四庫本、王雲鷺本には、前者はあるが（但し、「従事武梁碑」の記述に誤る。図二、A）、後者はないからである（同、B）。このことが、おそらく女史の後者を無視する原因となっている。そして、汪日秀本を改竄本と見做し、汪日秀本に拠って図二、A—Eの復原手続きを踏まない女史は、多分、後者「宣張」云々句。B）が前者（武開明が兄武梁のために作った闕。A）の句であることを、知らなかったのではないかと思われる。そのように考える時、Aを上げれば、当然言及せざるを得ないBを、女史の無視する不自然さも、理解出来る。

しかし、女史は、AとBの關係に気付かなかつたにせよ、斑碑注におけるB（「宣張」云々句）と西關銘との關係には、氣が付いていたようだ。それは、女史が全然別の箇所、五二七頁の終わりの部分で、

and a lengthy description is used once in the pillar-gate inscription and once in the Wu Liang commentary but applied to different subjects.

（応用する動機こそ異なるが、非常に長い記述が、一度は西關銘に、一度は武梁の注釈に使われている。）

と述べているからである。女史がそこで、Wu Liang commentaryと言っている点に、注目したい。女史は、B（「宣張」云々句）が、斑碑注以外のものではあり得ないにも関わらず、斑碑注とは決して言わない。そのことが問題なのは、その事実自体が、ニラン女史がB即ち、四部叢刊所収の隸釈において、王雲鷺本の欠落を補うべく挿入された泰定本を、殆ど無批判に斑碑注と見做したことを示している。文献に対するそのような女史の無定見さは、例えば西關銘を論じる女史の立場に、結果として強い疑いを抱かせずにはいないだろう。

さて、斑碑注の続きには、注意すべき一節があつて、  
闕以二月癸丑「作、碑以二月癸卯」立。相去浹辰之間

と記している。まず<sup>しやうしん</sup>浹辰は、十二支の一廻りで、普通十二日間のことを言うが、こゝは、十干の一廻り（癸卯―癸丑）、十日間のことを指している。また、二月癸卯は、二月二十三日のことだから（斑碑）、「闕以二月癸丑「作」の二月は、三月でなければならず、誤写の可能性もある。そして、右の一節から、武開明が兄梁のために作つた闕は、斑碑が出来て十日後、三月四日に完成していることが分かる。その日はまた、西關銘の完成した日に当たっているが、もし隸釈の「開明為「其兄」立「闕」が誤りでなければ、西關銘とは別の闕が、同じ日に作られたことになるだろう（誤りだとすると、右の一節は、西關銘のことを記したことになる）。このことは女史もまた、仮定としてhypotheticallyではあるが、認めている（注46）。そして、もう一つの闕の「傍」には、西關銘の後半と同じ、「宣張」云々の句が刻されていたとしなければならぬ（「傍云」の傍は、側面か）。即ち、隸釈の斑碑注によれば、西關銘の作られた建和元年三月四日には、西關銘とは別の闕が、武開明によって兄梁のために作られており（傍線部）、さらにその闕の「傍」にも、西關銘後半に見えるのと同じ、「宣張」云々の句（傍線部）があつたということになる。  
上掲年表の若干立て込んだ、建和元年の項は、このように理解することが出来る。ここで、二月に斑碑が作られ、

碑先、闕十日立、与、闕同時起工、故闕文牽連及之」とある。

ニラン論文二章の結論は、武氏に関わる五つの碑文が、歴史資料たり得ないことを主張している。そして、ニラン女史は、取り分け洪适に対して辛辣な批判を浴びせ、加えて、洪适による碑文の捏造をさえ、強く示唆するのである。その五二七頁以下の結論部から二、三、気の付いた問題を上げて、小稿の結びとする。

次に掲げるのは、斑碑に関する、女史の批判である。

The relevant gazetteers further increase our perplexity: the *Jizhou jinshi zhi* (Record of bronzes and stones in Jizhou; compiled 1843), for example, places a Wu Ban stele at Jiaxiang, with a stele head in two lines of seal script, even though Hong Gua specifically stated that the Wu Ban stele head was written in clerical script.<sup>52</sup>

52. *Jizhou jinshi zhi*, comp. Xu Zonggan (n.p., 1843), *Juan* 7, 3b-6b.

(関連する地志類が我々の混乱をなお一層深める。濟州金石志(濟州における金石の記録、一八四三年刊)は、例えば、篆書二行の碑額をもつ武斑碑を、嘉祥に配置する。洪适が、武斑の碑額は隸書で書かれていたと、特に言明していたにも関わらずである。<sup>52</sup>)

三月に二つの闕が作られた、その年の武氏一門の状況を考えてみる。建和元年の前後は、金郷の武氏が大きな変化を迎えた時期のようだ。まず二年前の永嘉元(一四五)年には、武開明の母即ち、武始公達四兄弟の母が没し(「開明碑」、さらに武開明の長子、武斑が亡くなるという悲運に見舞われている(斑碑)。そして、翌建和二年(一四八)年には、武開明も没し(開明碑)、その三年後の永嘉元(一二一)年には、武梁が亡くなっている(梁碑)のである。所謂武梁画像は、そのことと深く関係するが(梁碑)、一方、武氏祠の成立を考える上で、興味深いのは、武氏関連の五つの碑文が、この時期に集中して作られていることだろう(武梁碑のみやや遅れる)。さて、永嘉元年に没した武斑を傷み、同僚の史恢等が碑を作り、また、亡き母を偲んで、武始公等兄弟四人が西闕銘を作り、さらに趣旨は不明ながら、武開明が兄梁のために闕を作っているが、それらはおそらく同時に計画され、進行的に違いない。そして、それらは共に建和元年に完成し、碑は二月二十三日に、二つの闕は十日後の三月四日に、それぞれ竣工を遂げている。碑はその年紀を首書し、二つの闕は、同時に進行した武斑の閼歴を、同文で書き加えることによって、建和元年における各事業の相関性を、明らかにしようとしたものと思われる(清、桂馥の札樸卷八「武氏石闕」に、「其

52. 濟州金石志、全。徐宗幹(刊行地記載なし、一八四三年)、巻7。

右の記述で、女史が指摘しているのは、清、徐宗幹撰、涪州金石志卷七「嘉祥石」に、

故敦煌長史武君之碑篆額二行

とあることと(3 b-6 bの丁数表示は、1 a-3 bが正しい)、隸釈卷六の斑碑注に、

隸額在「涪州任城」

と記すこととの、矛盾を衝いたものである。女史の言い分によれば、斑碑の碑額には、恰も篆書で書かれたものと隸書で書かれたものと、全く異なる二種の碑額をもつものがあるかの如き印象を受ける。しかし、同じ涪州金石志、斑碑の末尾に、

按、此刻八分書、文十三行、題名五行。在「嘉祥城南二十八里武翟村紫雲山武氏祠内」

とあることが非常に重要で(山左金石志卷七、斑碑にも、「八分書、篆額」とある)、関野貞は、「圭首にして穿あり。

穿の上に八分書「故敦煌長史武君之碑」の題額を二行に記し、穿下に文を刻せり」と言っている(前掲書十三章丁

(イ)。そもそも斑碑の書体は、八分書(はぶんしよ)(秦の書体。篆書と

隸書の中間の字体。『大字源』『新字源』の「八分」参照)

で書かれており、それは、見方によつて篆書とも隸書とも言い得るものであつて、「篆額」(涪州金石志)や「隸

額」(隸釈)の呼称は、必ずしも斑碑が二種類あつたことを意味しない。斑碑の碑額は、現在読み取り得ないものながら、右の女史の批判は、例によつて斑碑そのものとは関わらぬ事柄とすべきである。

次に掲げるのは、「ニラン論文二章の注53、54である。

53. (前略) SZ, p.68, in noting an instance of misidentification by Hong Gua, criticizes him for "crudely making them [pieces of evidence] fit together" (*cunwei tufu*). The careful editors of the *Siku quanshu* would condemn Hong's quite tentative talk about Wu Liang: in their view, Hong had "not avoided stretching the wording" (*weimian qianhe qi ci*). See their Preface to the *Li shi* (*Siku* edition), vol. 681, p. 444 (3a-3b).

54. The phrase *que ze chuan jiang* ("Before he was capped, he transmitted and lectured"), which does not appear in *Jigu lu*, *Juan 3* /21a, is said of both Wu Rong and Wu Liang. A second formula employed in Wu Rong's inscription *guang xue chen cte*.. ("His broad learning was thorough; all the canonical texts he had read"), becomes in Wu Liang's inscription ("His broad learning was thorough; not one field of study had he failed to penetrate").

(53. (前略) 水経注碑録 (SZ) 68頁は「洪适による判断ミスの或る実例を指摘して、「それら『証拠の断片』が粗雑なやり方で互いに一致させられている。」(粗為符合)という理由で、彼を非難している。

四庫全書の慎重な編者達は、洪の武梁に関する全く当てにならない報告を責めようとした。彼らの見地からすれば、洪は「言い回しを過度に引き伸ばすことを避けなかった。」(未免牽合其詞)。隸釈に対する彼等の序文(四庫版)、巻68、44頁(3a-3b)を見よ。

54.「闕幘伝講」(「有資格者の印である」帽子を冠る以前に、彼は伝達講義を行った。)の句は、集古錄巻3/21aには見えないものだが、武榮と武梁の両方で言われている。武榮碑に用いられた第二の常套句「広学風徹」(彼の幅広い学問は徹底したものだ。彼は全ての聖典を読破した。)は、武梁碑のものとなっている(彼の幅広い学問は徹底したものだ。どの分野であれ究め損ったことがない。))

注53のSNは、施蟄存氏『水経注碑録』(天津古籍出版社、一九八七年)のことである。その巻二、四一「漢司隸校尉魯峻碑及石室画像」に記された、洪适(隸統)への評語「粗為符合」の意味を、女史は、

crudely making them [pieces of evidence] fit together

と、まるで洪适が証拠の断片を無造作に継ぎ合わせ、自分にとって都合の良い証拠を作り上げたかのように解している。ところが、それは、女史による「粗為符合」原文の、全くの誤読であろうと思われる。『水経注碑録』巻二、六十八頁の一部を示せば、次の通りである(隸統巻十七「魯峻石壁残画像」、隸釈巻九「司隸校尉魯峻碑」参照)。

《隸統》又著錄《魯峻石壁残画像》三幅、并広三尺、

高二尺、有題字四十八榜。洪氏云、『藏此者不知為何人碑、既有九江標榜、又有屯騎職掌、更有先賢形象、定為魯峻石壁所刻、其誰曰不然。』又云、『又有二石、長過于此、所画冠劍人物、絶類九江石壁、因疑此二石亦是魯祠四壁者。』可知洪氏僅拠石画題榜「君為九江太守時」諸語、考之魯峻碑文、粗為符合、遂断定其所得者為魯峻祠石壁所刻、窃恐其猶有可疑也。惜趙明誠于其所得画像無跋、遂不克為洪說參証。吳玉搢云、『石祠画像、久矣不存。』故洪氏以後、不更見著錄。然今山東博物館中漢画残石累累、恐其間猶有魯祠旧刻、一失其所、夷于隱淪、物与人有同然矣

『水経注碑録』の傍線部「粗為符合」は、洪适が、或る画像について、魯峻碑の記す官歴、「九江太守」や「屯騎校尉」などが、画像中の榜題と一致する所から、その画像を魯峻石壁画像と判断したことに対し、言われたものである。その意味は、「(洪适の考えは)」おおよそは合っているが、その結果、洪适の入手した画像を、魯峻祠の石壁に彫られたものだとしてしまうのは、実際の所、まだ疑問の残ることが気に掛かる」ということであろう。

同じ注53の中で、次に取り上げられているのは、隸釈の四庫提要である。ニラン女史は、四庫提要から、洪适に関する「未免牽合其詞」という句を引用し、それを、

Hong had "not avoided stretching the wording"

と解釈して、洪适が原文の言い回しを過度に引き伸ばし、根拠のない余計な意味を付け加えたことに対する、提要編者の批判の如くに捉えている。これも、女史が「未免牽合其詞」を誤読したものと思われる。四庫提要の該当部を示せば、次の通りである。

武梁祠堂画像、武氏本不著名字、适因武梁碑有後建祠堂雕刻画之語、遂定為武梁祠堂。按、梁卒於桓帝元嘉元年、而画像文中有魯莊公字、不諱改、嚴、則当是明帝以前所作。金石錄作武氏石室画像、較為詳審。适未免牽合其詞。

The careful editors of the *Siku quanshu* という筆致から、女史は、四庫提要を肯定しているかのように見えるが、実は、四庫提要の言わんとしていることは、単純ではない。提要は、まず武梁画像中の「魯莊公」の榜題（第一石第三段、曹沫図）に着目し、それが以前に触れた後漢明帝（治五七―七五）の諱、莊を避けて嚴と改めるべき所を、そのままにしていることから、武梁画像は「明帝以前所作」に違いないと主張している。ところが、武梁は元嘉元（一五一）年に没しているので、それを洪适の如く、「武梁祠堂画像」（隸釈卷十六、隸統卷六）とすると、時代が合わない。金石錄の「漢武氏石

室画像」（卷二、卷十九）の呼称を是とし、洪适の説を斥けたのである。そして、洪适は、梁碑に「後建祠堂」「雕刻画」などの語のあることを以つて、件の画像を「武梁祠堂画像」と命名しているので（隸釈卷十六）、提要は、その洪适の説の根拠を否定すべく、「适未、免、牽、合其詞」（洪适は、単に見掛け上、関連がありそうな梁碑の表現を、画像に引き合わせただけのことだ）と批判したのである。

さて、例えば女史の如く、不用意に四庫提要の洪适批判を肯定すると、それに付随して、武梁画像を明帝以前、一世紀に制作されたものとせざるを得なくなってしまう点が、聊か厄介である。武梁画像が明帝以前のものとは、到底思われないからである。この問題については、陳垣の史諱举例が参考となる。その巻一「避諱改字例」に、後漢明帝の諱、莊を避けない例として、

和平元（二五〇）年嚴訢碑曰「兆自楚莊」、延熹三（一六〇）年孫叔敖碑曰「莊王置酒以為樂」、中平元（一八四）年郭究碑曰、「嚴莊可畏」、是不避莊

とあって、「則漢時避諱之法亦疏、六朝而後、始漸趨嚴密耳」と言う。武梁画像の「魯莊公」も、同様の例に属するものと考えたい。ところで、四庫提要の洪适批判を引用する女史は、その批判を前提として導かれた、提要の結論をも認めているのであろうか。不可解なことに、女史は、

提要の結論を認めるどころか、提要とは全く正反対の見解を取っているようだ。と言うのは、ニラン論文三章の注48(556頁)を見ると、

The *Siku quanshu* editors adopted Gu's view in the preface to Hong Gu's work.

(四庫全書の編者達は、洪适の作品〔隸釈〕への序文〔提要〕において、顧〔藹吉〕の見方を採用した。)

とあって、女史は、顧藹吉の隸弁卷八の、愚按、画像中所題魯莊公莊字、不<sub>レ</sub>避<sub>三</sub>明帝諱、似<sub>レ</sub>非<sub>三</sub>武梁祠堂所<sub>レ</sub>刻。梁蓋卒<sub>三</sub>於桓帝時<sub>二</sub>也……武氏有<sub>二</sub>數墓<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>定<sub>三</sub>此刻為<sub>二</sub>何人墓前者<sub>一</sub>。当<sub>下</sub>從<sub>三</sub>金石錄題為<sub>二</sub>武氏石室画像<sub>一</sub>可<sub>上</sub>耳(同治十二年重刊本。四庫本も同じ)

を、提要の「按」以下が基づく所であると指摘しており(注48には、Gu Aiji, Li bian, juan 8/38b-40aの参照指示へ四庫本がある)、さらにその隸弁の記述について、三章五三五頁右に、

Instead, he states plainly that the labels he knows, which include a reference to Duke Zhuang of Lu, cannot date from Eastern Han.

(代わりに、彼〔顧藹吉〕は、彼の手許にある、魯の莊公への言及を含んだ標題〔を有する画像石の制作年代〕は、後漢には溯り得ないとはっきり明言している)

と述べているからである。つまり女史は、提要の前提とする洪适批判は引用するが、武梁画像を明帝以前とする結論は認めず、逆に、それを後漢にさえ溯り得ないとする、顧藹吉の説を支持していることが分かるだろう。このような女史の提要の引き方は、自説に都合の良い部分だけを引用して、あとを無視する、聊か恣意的な面が目立ち、信用し難いのだが、さらに問題なのは、顧藹吉が武梁画像を「後漢には溯り得ない cannot date from Eastern Han」とはっきり明言している states plainly」と、女史が主張することである。何故なら、上記隸弁が述べているのは、「私〔顧藹吉〕が思うに、〔武梁〕画像中に榜題された、魯莊公の莊の字は、明帝の諱〔莊〕を避けておらず、〔その榜題は〕武梁祠堂に彫られたものではないようだ。梁は大体、桓帝の時に亡くなっている……武氏には幾つもの墓がある〔と金石錄に言う通り〕、この彫り物を、誰の墓前のものと決定することは不可能である。およそ金石録が武氏石室画像と名付けているのに従うのがよからう」ということに過ぎず、顧藹吉は、「後漢には溯り得ない」などとは、少しも述べていないからである。加えて、隸弁卷二、平声下陽第十の「莊」を開くと、そこには、

武梁祠堂画像、魯一公。按、後漢明帝諱莊。故若<sub>二</sub>莊周莊助<sub>一</sub>、皆改為<sub>レ</sub>嚴。諸碑莊字、亦從<sub>二</sub>變体<sub>一</sub>……惟此作<sub>レ</sub>

莊。不<sup>レ</sup>著<sup>二</sup>年月、其在<sup>二</sup>明帝前<sup>一</sup>乎。金石錄名<sup>レ</sup>此爲<sup>二</sup>武氏石室画像、未<sup>レ</sup>定<sup>二</sup>武氏何人<sup>一</sup>。隸<sup>レ</sup>釈以<sup>二</sup>武梁碑<sup>一</sup>…  
…遂定爲<sup>二</sup>武梁祠堂画像、武梁卒<sup>二</sup>於桓帝元嘉元年<sup>一</sup>。  
恐未<sup>二</sup>必是<sup>一</sup>也

とあつて、顧藹吉の武梁画像に対する捉え方は、「其在<sup>二</sup>明帝前<sup>一</sup>乎」、即ち、後漢の明帝以前かというものであり、まず提要の「明帝以前所<sup>レ</sup>作」は、これも顧藹吉の説に添うものであつたことが知られる。そして、女史の、顧藹吉が武梁画像を「後漢には溯り得ない cannot date from Eastern Han」と、はつきり明言<sup>二</sup>している states plainly<sup>一</sup>という主張は、全く事實に反していることが分かる。従つて、女史の右の主張は、学問的にあつてはならない嘘である、とされても仕方のないものとなっている。ともあれ、女史は、隸<sup>レ</sup>弁を正しく読んでいないことが、確かである。私が甚だ理解し難く思うのは、ニラン論文二章注53に指摘された『水経注碑錄』にせよ、四庫提要にせよ、或いは、右の顧藹吉（隸<sup>レ</sup>弁）にせよ、その片言隻句を掴まえて、資料から見れば、大変無理のある洪适批判、武梁画像批判を展開しようとする、女史の姿勢なのである。さて、ニラン論文注53以下における洪适、また、武梁画像に対してなされた非難は、いずれも洪适、また、武梁画像にとつて本来謂われのない、迷惑千万な言い掛かりに過ぎないことを、洪适、

そして、武梁画像のために、ここに明らかにしておく。

最後に、注54は、「闕幘伝講」、「広学甄微」という二句が、榮碑と梁碑とに共通して現われることを、問題としたものである（集古録の丁数表示は、22 a が正しい）。榮碑は、集古録と隸<sup>レ</sup>釈にのみ記載されるが、集古録に二句の見えないのは、拓本が悪かつたのだろう（「其餘文字残缺」等とある）。梁碑は、金石録と隸<sup>レ</sup>釈とに記載され、二句の前者（「闕幘伝講」）は、両書に見えている。後者が金石録に見えないのは、おそらく省略されたためである。武梁、武梁の二人は、共に学問に精励した点、非常によく似ており、そのことを叙した措辞が、たまたま一致しただけのことと思われる（「闕幘伝講」句の用例については、一考を要する）。

ニラン論文二章の結論部において、女史は、武氏一族に関する歴史資料としての、五つの碑文を否定し（527頁左）、それらは、武氏一族の實在を証明するものではないと言う（527頁右）。また、特に洪适の隸<sup>レ</sup>釈を中心とする記録類には、歴史資料として重大な欠陥が予想されると述べ（同）、剩え女史は、それらが洪适ないし、南宋以降の何人かにより偽造されたものである可能性をさえ、強く示唆している（528、529頁）。そして、女史はその結果として、所謂武梁



画像を始めとする武氏祠画像石を、従来の武氏一門から切り離し、複数の軍人（武人）貴族のための記念物の集合体と見做すに至っている（528頁）。

私なりにニラン論文 *Stele Summary* の結論を要約すれば、以上のようになる。では、ニラン論文の二章は、正しいのであろうか。即ち、これまでの武氏祠画像石に関する通説は、学問的にもはや成り立たないものとなってしまうたのであろうか。答えは、否である。むしろ逆に、成り立たないのは、ニラン女史の主張の方である、とすべきだろう。以下にその理由を述べる。

まずニラン女史の、歴史資料としての五つの碑文に対する批判は、上に見て来た如く、諸資料の位相を見誤ったものである場合が多く、ために批判が批判として成り立つておらず、結果としてその歴史性を否定することに、完全に失敗している。問題提起として興味深いことは、数多いのだが、目下、研究上の論証として、取り上げるに足る点は、皆無に近い。そして、五つの碑文を批判することは、それらの主要な提供者でもある洪适を批判することへと、必然的に繋がってゆく。しかし、女史の洪适批判は、そもそも文献学的手法から見て、甚だ疑問とすべきものが過半を占めている。例えば女史は、洪适の隸釈の本文を使うに際し、基本的に四庫全書本に拠っているが（二章注2）、

一方で汪日秀本を軽視また、無視することを意味する、その女史の方針が、果してどのような論証の結果を招くか、これも上に見た通りである。それは、武斑碑、武梁碑の本文を見失うことから始まって、出口のない迷路へ足を踏み入れる、第一歩に外ならないだろう。また、女史は、恰も洪适に当て付ける如く、記録類の欠陥を指摘し、さらに、洪适による碑文テキストの偽造の可能性をさへ示唆している。所謂五つの碑文に関する限り、それでは余りに洪适が気の毒というものだ。これまで見てきた通り、少なくとも女史の主張する点において、洪适の方に非は認め難いためである。欠陥があるのは、むしろ女史の批判の方である。

さらに捏造を非難されるべきは、これまた、女史の批判の方なのではないか。故に、女史の洪适批判は、学問的に殆ど成立しておらず、多くが言い掛かりの域を出ないものと見ざるを得ないものばかりである。結局、舌鋒鋭い女史の批判にも関わらず、五つの碑文が歴史性を失った訳ではなく、また、洪适にも言われるような非がないとするならば、従来の武氏概念は、なお生きているものとすべきであろう。従って、武梁画像を武氏から切り離す理由はないとしなければならぬ。そして、女史の主張する如く、それを敢えて軍人（武人）貴族へ結び付ける必要もないだろう。

武氏祠画像石は、並ぶもののない極めて貴重な、中国古

代の文化遺産であり、武氏一門は、そのロマンを象徴するものである。その「確証あるにあら」ず、「此等石室の何人に属すべき者たるやは明かならざれども」「姑く之に従ふ」という、冒頭に引いた関野の言葉通り、通説は最初から資料のミッシングリンクを認めている。ニラン論文=Stele Summaryを、例えば通説の側から眺めると、女史は、その「確証あるにあらざ」る一面を、忠実に反復したものと映るに違いない。

私の心から尊敬する、中国古代石刻の専門家、趙超教授は、現存する武斑碑、武荣碑、西闕銘が、宋以来の記録に残ること、漢碑としての正しい様式に則っていることから、偽刻とは考えられないと言う。私も趙教授の意見に従いたい。ニラン論文の III. The Wu Liang pictorial Stones: The Literary Evidence も、非常に興味深いものである。その三章については、また機会を改めて述べることにしよう。

#### 付記

私の乏しい英語力のせいで、私がニラン女史の原文を読み誤り、もし間違った批評をしていたら、女史にお詫びする。ただ、何と言っても女史は世界的な大家であって、批判に際しては一切、手心を加えなかった。万一、礼を欠くような節があったなら、女史の寛恕を乞いたい。

多岐に互る御教示を賜った、中国社会科学院考古研究所の趙超教授に、心から御礼を申し上げる。教授の助言がなければ、小稿が成ることはなかっただろう。

小稿は、平成17年度科学研究費補助金基盤研究(B)(1)による成果の一部である。